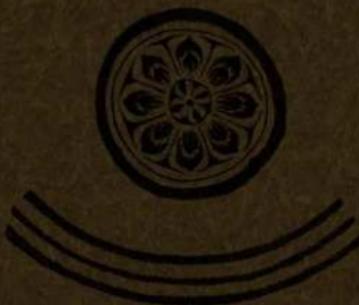


仙台市文化財調査報告書第178集

宮城県仙台市

郡山遺跡XIV

—平成5年度発掘調査概報—



1994.3

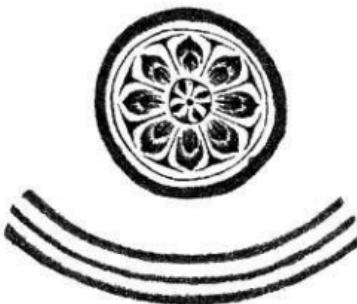
仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第178集

宮城県仙台市

郡山遺跡XV

—平成5年度発掘調査概報—



1994.3

仙台市教育委員会

序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は14年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じておりますことは、古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方に御承知のことと存じます。

幻の城櫓としての一端を現した昭和54年以来、継続的に進められてきた発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城櫓”はまさに“甦る城櫓”として私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度の調査では昨年に引き続きⅠ期官衙の材木列（廻跡）などが発見され、Ⅰ期官衙の様相が次第に解明されつつあります。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にありますが、そのような中にあって、継続的な調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くの御協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深い御理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成6年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒 英

例　　言

1. 本書は郡山遺跡の平成5年度範囲確認調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業である。
3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　　長島栄一　I、II、III、V、VI

熊谷裕行　IV

遺構トレス　菅井百合子、日比野園子、永田英明

遺物実測　　稻葉俊一、熊谷、小佐野章子、菅家婦美子、吉田りつ子、伊勢多賀子
佐藤栄子

遺物トレス　菅井、日比野、菅家

遺構写真撮影　長島、熊谷

遺物写真撮影　稻葉

遺物補修復元　赤井沢千代子、洞口れい子

図版作成　　永田、熊谷

編集は長島・熊谷・永田がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点(X=0、Y=0)とし、高さは標高値で記した。
5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

SA 柱列などの跡　SE 井戸跡　SX その他の遺構

SB 建物跡　SI 壁穴住居跡・壁穴遺構　P ピット・小柱穴

SD 溝　　跡　SK 土　坑

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

C 土師器(ロクロ不使用)　G 平瓦・軒平瓦

E 須恵器　H その他の瓦

F 丸瓦・軒丸瓦　N 金属製品

8. 遺物実測図の中心線は、個体の残在率がほぼ50%以上は実線、ほぼ25~50%で一点鎖線、これ以下は破線とし、網スクリーン張り込みは黒色処理を示している。
9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(古山・佐藤:1970)を使用した。

目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 調査計画と実績	2
III 第98次発掘調査	4
1. 調査経過	4
2. 発見遺構・出土遺物	5
3. まとめ	12
IV 第99次発掘調査	15
1. 調査経過	15
2. 発見遺構・出土遺物	15
3. まとめ	27
V 第100次発掘調査	29
1. 調査経過	29
2. 発見遺構・出土遺物	31
3. まとめ	36
VI 総括	38
調査成果の普及と関連活動	45
写真図版	49

I はじめに

平成5年度は郡山遺跡範囲確認調査第3次5ヶ年計画の4年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 白鳥良一

管理係 係長 菅原澄雄

主任 村上道子

主事 斎藤英治

主事 佐藤寿江

調査第一係 係長 田中則和

主任 木村浩二

主事 長島栄一

教諭 熊谷裕行

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北大学工学部名誉教授 建築史）

副委員長 工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授 考古学）

委員 岡田茂弘（国立歴史民族博物館 考古学）

千葉景一（宮城県多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長 歴史学）

須藤 隆（東北大学文学部教授 考古学）

今泉隆雄（東北大学文学部助教授 歴史学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地権者 赤井沢久治、菅原一雄、菅原一幸、小林喜代治、小林広志、斎藤三雄

調査参加者 赤井沢きすい、赤井沢サダ子、赤井沢千代子、伊勢多賀子、伊勢みづ、伊藤貞子、大友節子、大友鶴雄、尾形陽子、小佐野章子、小嶋登喜子、小沼佳代子、菅家婦美子、工藤ゑなよ、小池房子、小林テル、佐々木直子、佐藤栄子、菅井百合子、高橋ヨシ子、千田あや子、永田英明、口比野園子、洞口れい子、牧かね子、吉田りつ子

II 調査計画と実績

平成5年度の発掘調査は平成2年度から始められた「郡山遺跡範囲確認調査」第3次5ヶ年計画案にもとづく第4年次めである。計画案によれば今年度はII期官衙と同時期の郡山廃寺中権伽藍東部の調査予定であった。しかし仙台市が計画している再開発事業との関連から昨年度に引き続き、I期官衙の南西部へと調査地点を変更したのである。これについては平成4年度の調査指導委員会で了承を得ている。発掘調査費については国庫補助金の内示(総経費1,700万円、国庫補助金額850万円、県費補助金額425万円)を請けたことから、次のような実施計画案を立案した。

表1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	地区予定期間	地区予定期間
第99次	I期官衙西部地区	350 m ²	9月～10月
第100次	I期官衙南部地区	350 m ²	10月～11月
計	2地区	700 m ²	9月～11月

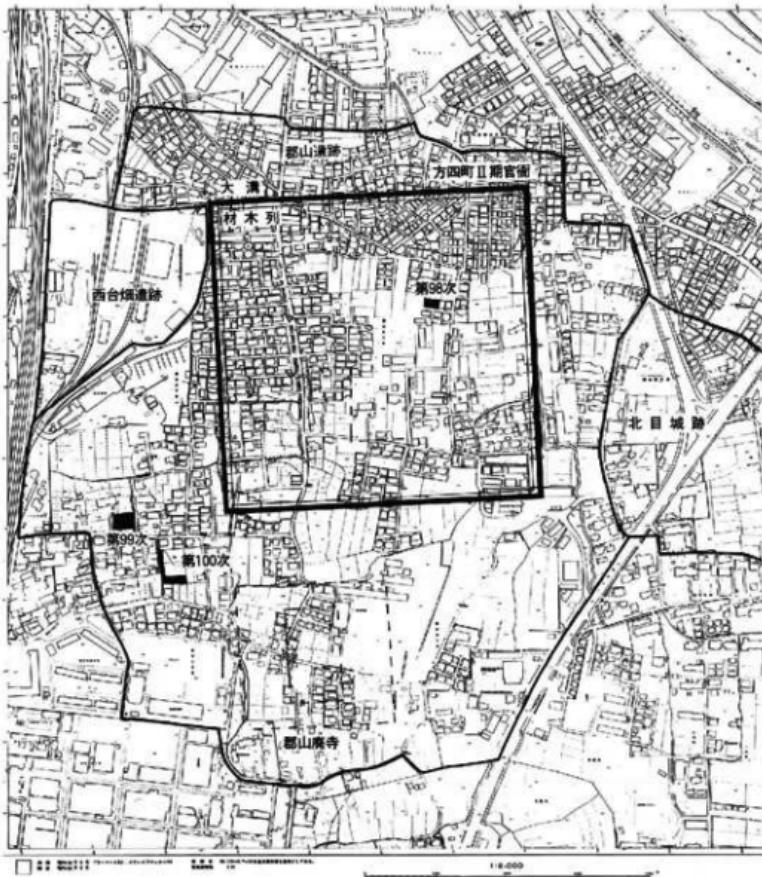
またこの他に関連遺跡の遺構確認調査として、燕沢遺跡の性格究明のための調査も併せて立案(仙台平野の遺跡群)している。

事業開始にあたり郡山遺跡内個人住宅の立て替えに伴って、方四町II期官衙の中央やや東寄りの地点で緊急に調査を行う必要が生じ、第98次調査も追加して実施した。なお個人住宅などの小規模な開発に伴う発掘調査は仙台平野の遺跡群で対応しているが、郡山遺跡での一連の発掘調査のための本概報に記載することとし、「仙台平野の遺跡群XIII」には概要のみを掲載している。

したがって今年度は以下のような内容で発掘調査を実施した。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第98次	II期官衙中央地区	60 m ²	7月12日～9月1日
第99次	I期官衙西部地区	350 m ²	9月1日～12月13日
第100次	I期官衙南部地区	180 m ²	10月12日～12月17日
計	3地区	530 m ²	7月12日～12月17日



第1図 郡山遺跡全体図

III 第98次発掘調査

1. 調査経過

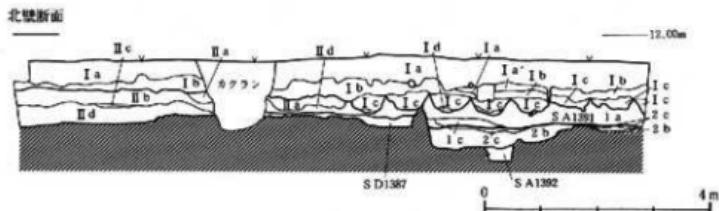
第98次調査は、仙台市太白区郡山3丁目22-17 斎藤三雄氏より同地において、専用住宅新築に伴う発掘届が平成5年1月18日付けで提出された。したがって平成5年7月12日から9月1日まで敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は方四町II期官衙の中央北東寄りの地点で、外郭北辺から南へ140mの位置にありこれまでに実施された第87次、第88次調査区に近接している。この周辺の調査ではII期官衙の中央部にありながら、I期官衙にかかる遺構が多く検出されている。調査は建築される建物の基礎部分の深度が深いため、建物の範囲を対象に南北

7m、東西13mの調査区を設定して実施した。なお盛土が予想以上に厚かったため、遺構を検出した上面では60m²の調査区となった。



第2図 第98次調査区位置図



層位	土色	土性	備考
II c	10 YR 4/4 黒褐色	粘土質シルト	宅地の盛土
II a	10 YR 3/1 黒褐色	シルト	疊化鉄を多量に含む
II b	10 YR 4/4 黒褐色	粘土質シルト	畑の耕作土(新)
I c	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	リ
I d	10 YR 4/3 にぼい黒褐色	シルト	リ
I a	10 YR 4/4 黒褐色	シルト	畑の耕作土(旧)
I b	10 YR 3/3 黒褐色	シルト	リ
I c	10 YR 3/3 黒褐色	シルト	リ
I d	10 YR 4/3 にぼい黒褐色	シルト	リ
SI 391			
I a	10 YR 3/3 増毛	シルト	堆積土
I b	10 YR 4/4 黒褐色	粘土質シルト	堆積土
I c	5 Y 3/2 増毛	シルト	堆積土
I d	2.5 Y 3/2 黒褐色	シルト	堆積土
2 a	10 YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	褐色土をブロック状に含む
2 b	10 YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	リ
2 c	10 YR 4/2 広葉黒	シルト質粘土	リ
SA1392			
1	2.5 Y 3/2 黒褐色	シルト	無機汚泥土
SD1397			
1	10 YR 5/1 深灰色	粘土質シルト	赤褐色粘土をブロック状に含む

第3図 第98次調査区土層断面図

2. 発見遺構・出土遺物

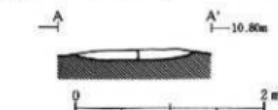
今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑3基、溝跡3条、柱穴1、ピットなどである。調査区が狭小なため、ほとんどが遺構の一部を検出したにすぎない。

SK1383 土坑 長軸 1.26×短軸 1.15 m の梢円形の土坑で、深さは 10 cm ほどである。堆積土は褐色粘土である。遺物は堆積土中から少量の土師器坏、壺片が出土している。

SI1386 を切っている。

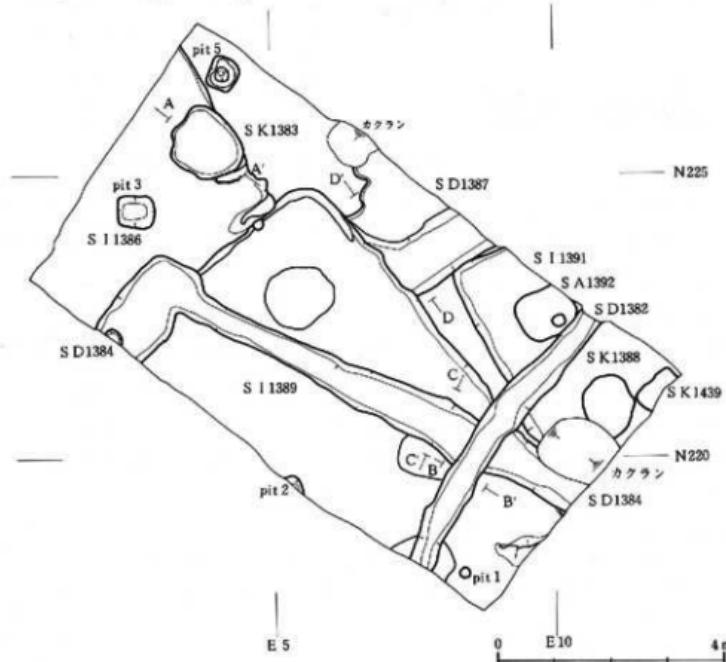
SD1382 溝跡 上幅 45~52 cm、下幅 10~40 cm、深さ 11~25 cm、断面形は逆台形で壁は直線的に立ち上がっている。方向は N-30°-E である。調査区の南壁ぎわで東にやや蛇行する。堆積土は黒色シルトである。遺物は堆積土中から土師器坏、壺片が出土している。

SI1389、SI1391 を切っている。



層位	土色	土性	備考
1	10 YR 褐灰色	粘土	

第4図 SK1383土坑断面図



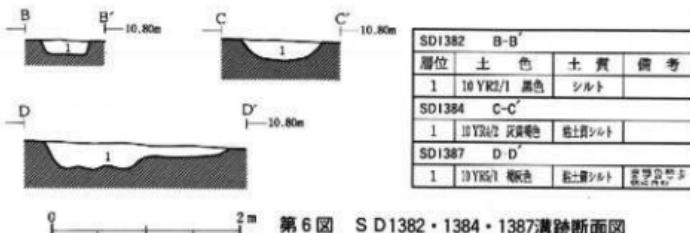
第5図 第98次調査区遺溝配置図

SD1384 溝跡 上幅 45~115 cm、下幅 25~90 cm、深さ 11~22 cm、断面形は U 字形で壁は緩やかに立ち上がっている。方向は E-19°-S である。調査区の南壁ぎわで L 字に屈曲した南北方向となる。堆積土は灰黄褐色粘土質シルトである。この溝跡を境にして、南では耕作による削平が著しい。遺物は堆積土中から土師器 C-725 壊 (第 15 図 2)、両面黒色処理された土師器壊底部片を含む土師器壊、甕片が少量出土している。

SI1386, SI1389, SI1391 を切り、SD1382 に切られている。

SD1387 溝跡 上幅 173~243 cm、下幅 54~120 cm、深さ 22~28 cm、断面形は深さ 10 cm のところで平坦となっており、途中に段を形成し底面にいたっている。底面はやや凹凸がある。方向は N-61°-E である。溝の西側の平面形が一定でない。堆積土は褐灰色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

SI1391 を切り、SI1389 に切られている。



第 6 図 SD1382・1384・1387 溝跡断面図

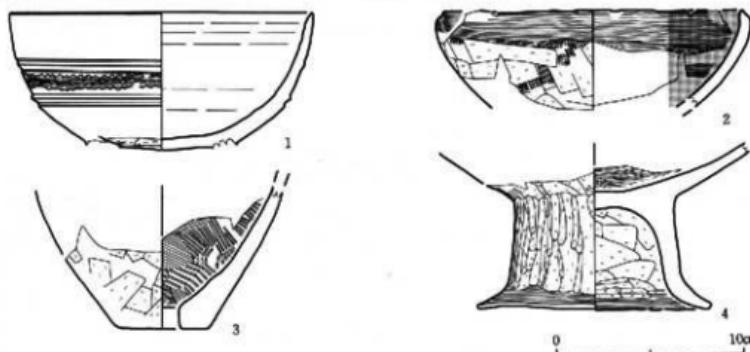
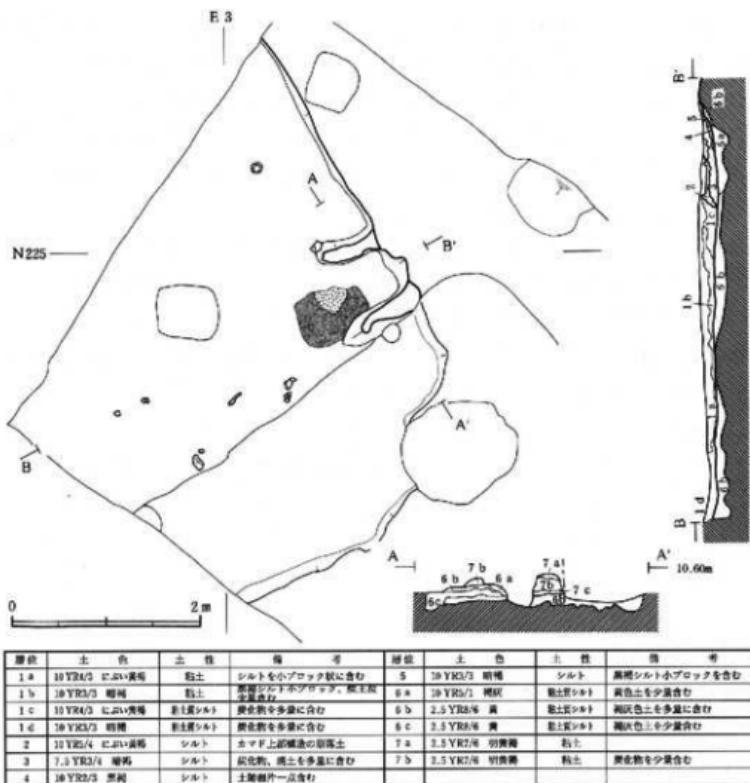
SI1386 積穴住居跡 東西 5 m 以上、南北 4.5 m 以上の隅丸方形と推定される積穴住居跡である。北壁方向で E-53°-S である。残存する床面までの深さは 5~15 cm で、堆積土はぶい黄褐色、暗褐色粘土などである。北壁中にカマドが位置し、舌状にやや張り出している。カマドの前面に焼土と炭化物が集積している箇所がある。柱穴は検出されなかった。

遺物は床面上から脚部のケズリ痕跡が明瞭で、壊部内面が黒色処理された土師器 C-731 高壊 (第 7 図 4) が、カマドのソダ構築土中から壊部外に波状沈線の刻まれた須恵器 E-365 高壊 (第 7 図 1) が出土したほか、住居の掘り方埋め土中からも土師器 C-726 壊 (第 7 図 2) や C-728 壊 (第 7 図 3) などが出土している。その他カマド内から土師器片、須恵器片が各 2 点、掘り方から土師器の小片が多量に出土している。

SI1389, SK1383, SD1384 に切られている。

調査 番号	立 場 形 式	出 土 地 点	法 面 積(m ²)	外 面 調 査				内 面 調 査				備 考	寄 附 記
				北 壁	東 壁	西 壁	南 壁	北 壁	東 壁	西 壁	南 壁		
1 E-365 須恵器 高壊	圓形 窓	96 次	SK1383 SI1386	7.4	16.2	ロ ク ロ	比 重	判 別 ハラタガロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ		30-2
2 C-725 土師器 片	圓形 窓	96 次	SI1386	掘 ち 方	16.2	チ デ	ハラタガロ	チ デ	ナ デ	チ デ	ナ デ		
3 C-726 土師器 片	圓形 窓	96 次	SI1386 SI1385	掘 ち 方	5	チ ズ リ				ハナメーナ	テ ラ ナ デ		30-3
4 C-731 土師器 片	圓形 窓	96 次	SI1386	掘 ち 方	12.5	ハ ラ タ ガ ロ	解 性 薄 い ニ コ ナ ド	解 性 薄 い ニ コ ナ ド	解 性 薄 い ニ コ ナ ド	解 性 薄 い ニ コ ナ ド	解 性 薄 い ニ コ ナ ド		30-1

第 3 表 SI1386 積穴住居跡出土遺物観察表

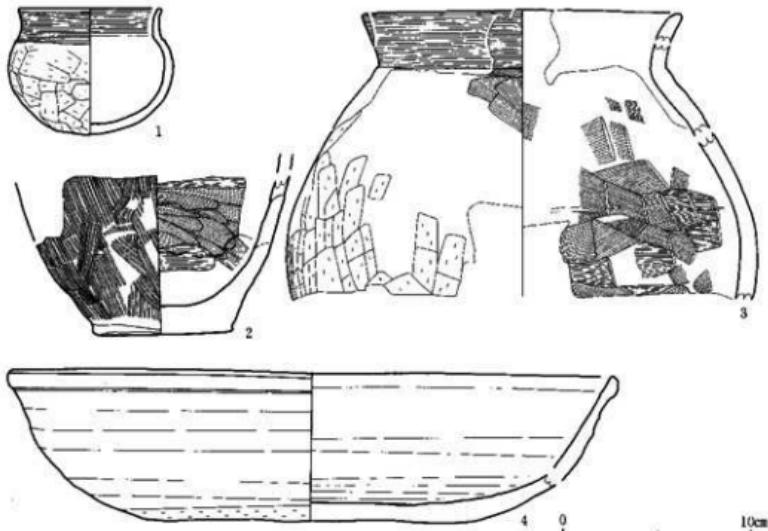


第7図 S.I.1386整穴住居跡平・断面図、出土遺物

SI1389 穫穴住居跡 東西 7.5 m 以上、南北 4.4 m 以上の長方形と推定される竪穴住居跡である。北壁方向で E - 43° - S である。最も良好に残存する床面までの深さは 15 cm で、住居南半は後世の耕作により削平されている。堆積土はにぶい黄褐色、暗褐色粘土質シルトなどである。北壁東端隅にカマドが位置していると推定される。カマドの燃焼部底面には石製の支脚が埋設されている。カマド内には焼土と炭化物が集積している。柱穴は Pit 1~3 まで検出された。Pit 1 からのみ直径 20 cm の柱痕跡が検出された。

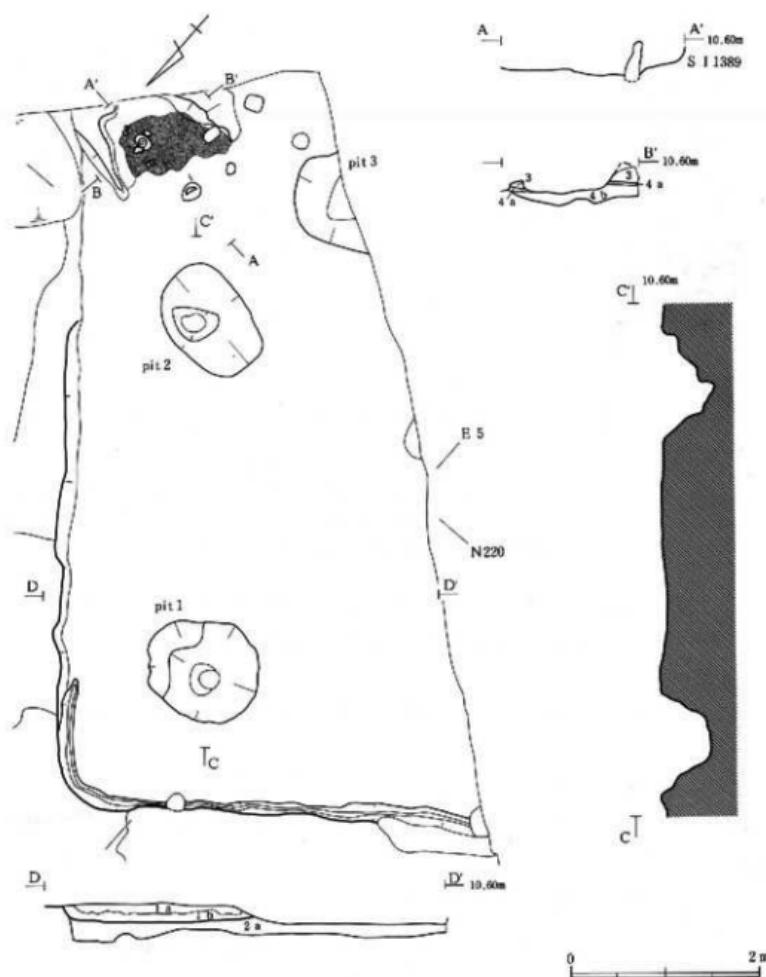
遺物は床面上から体部から底部にかけてケズリ痕跡が明瞭な小型の土師器 C-724 壊 (第 8 図 1)、同じくケズリ痕跡が明瞭な土師器 C-721 壊 (第 8 図 3)、外面ハケメ調整が明瞭な土師器 C-720 壊 (第 8 図 2)、大型で深みのある須恵器 E-364 壊 (第 8 図 4)、カマド内から外面ハケメ調整の土師器 C-723 壊片 (第 10 図 2)、石製の K-27 支脚 (第 10 図 1) などが出土している。その他堆積土 1 層や焼土中から土師器片が少量出土している。

SI1386、SI1391、SD1387 を切り、SD1382、SD1384 に切られている。



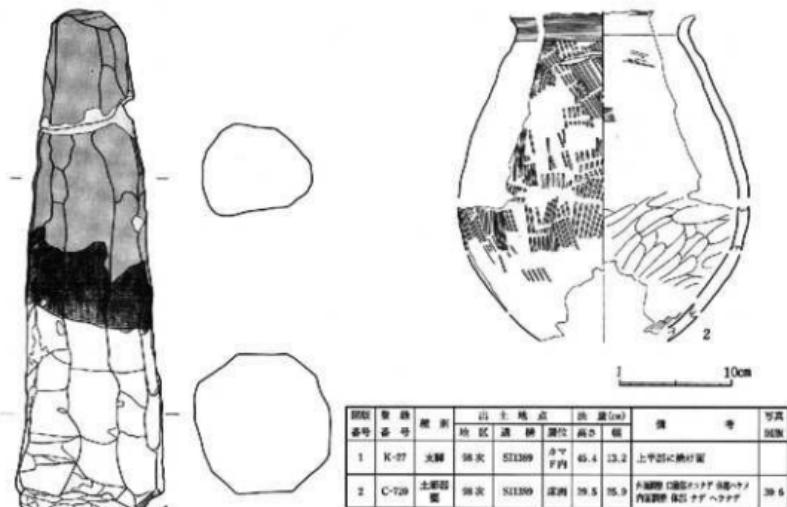
登録番号	分類	種類	形	出土地点		深度(cm)	外 面 回 転			内 面 回 転			写真	写真		
				地名	遺構		層位	留置	口径	詰押	II 摺部	体 部	底 部			
1	C-724	土器	壊	96 次	SD1389	床面	6.75	7.6			*コナデ	ヘラケズリ			30-5	
2	C-723	土器	壊	96 次	SD1389	カマド					ハタケ				30-4	
3	C-721	土器	壊	96 次	SD1389	床面	17				*コナデ	ヘラケズリ				
4	E-364	須恵器	壊	96 次	SD1389	床面	6.0	12			ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	30-7

第 8 図 SI1389 穫穴住居跡出土遺物(1)



層位	土色	土質	備考
1 a	10 YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
1 b	10 YR4/3 黒い暗褐色	粘土質シルト	
2 a	10 YR5/1 冰灰	粘土質シルト	腐化物極上多量
3	10 YR4/4 灰	粘土質シルト	
4 a	10 YR7/4 におい臭黒色	粘土	黑色粘土を多量に含む
4 b	10 YR7/4 におい臭黒色	粘土	

第9図 S I 1389堅穴住居跡平・断面図



第10図 SII1389竪穴住居跡出土遺物(2)

SII1391 竪穴住居跡 東西 4.4 m 以上、南北 2.8 m 以上の竪穴住居跡と推定される。南壁方向で E-56° - S である。残存する床面までの深さは 25 cm で、堆積土は暗褐色シルトなどである。柱穴は検出されなかった。

遺物は堆積土第1層や掘り方中から土師器、須恵器片が少量出土したのみで、床面からは出土しなかった。

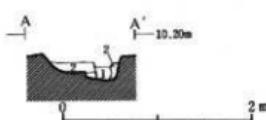
SA1392、SK1388 を切り、SII1389、SD1387 に切られている。

SA1392 柱穴 一辺 0.85×1 m の柱穴で、直径 20 cm の柱痕跡がある。掘り方の底面が柱痕跡の箇所のみ 6~10 cm 低くなっている。掘立柱建物跡の一部と考えられる。遺物は出土しなかった。

SII1391、SD1382 に切られている。

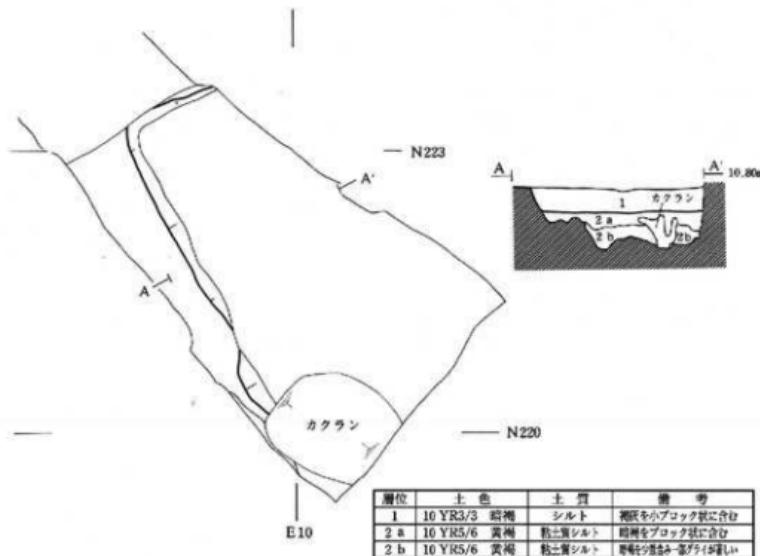
SK1388 土坑 長軸 1.15×短軸 0.9 m の橢円形の土坑で、深さは 50 cm ほどである。堆積土は褐色シルトである。遺物は出土しなかった。なお発見された位置から SA1392 柱穴との関連も検討したが、柱痕跡が検出されないことや検出時の上面の平面形、さらに底面の形状の違いから柱穴とは別の遺構と判断した。

SI1391 に切られている。

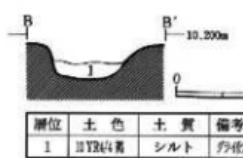


測定番号	土色	土質	備考
1	18YR 4/4-7/8	粘土	黒色
2	2.5 Y3/2 黒褐	シルト	黒色

第11図 SA1392柱穴断面図



第12図 S I 1391竪穴住居跡平・断面図

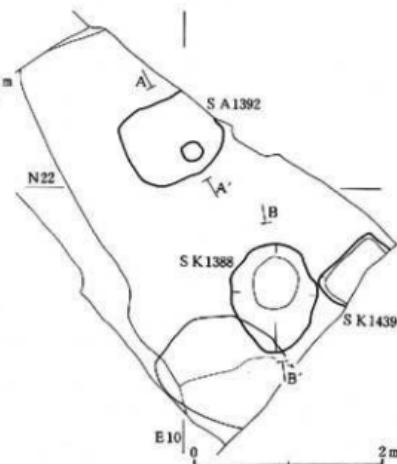


第13図 SK 1388土坑断面図

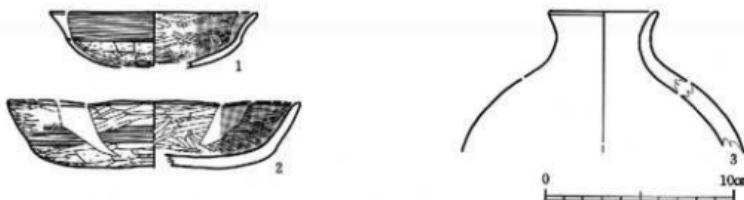
SK1439 土坑 一辺 0.8×0.3 m 以上の方形の土坑で、深さは 32 cm ほどである。堆積土はぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

SI1391 に切られている。

これらの構造、遺物の他に表土中から土器、須恵器片が少量出土している。図示可能な遺物は土器 C-730 壊 (第15図 1)、須恵器 E-366 壺 (第15図 2) の 2 点である。



第14図 S I 1391竪穴住居跡下層平面図

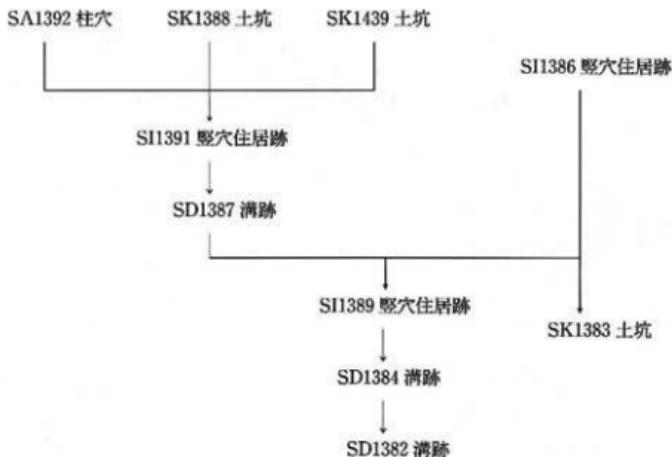


遺構番号	立場	縦幅	深さ	出土実例	法寸(cm)	外周溝量	内周溝量	備考			
	地区	遺構	部位	器種	口径	底径	高さ	口縁部	全体部	底部	内壁
1 C-738	上田原 环	98次	表層		9.5	ココナツ	ケズリ		ミガキ	ミガキ	内面磨合記憶
2 C-725	上田原 环	98次	SDG384		3.6	15.6	ココナツ	ケズリ	ミガキ	ミガキ	内面磨合記憶
3 E-366	表層	98次	表層		9.8				ロクロ	ロクロ	

第15図 第98次調査出土遺物

3.まとめ

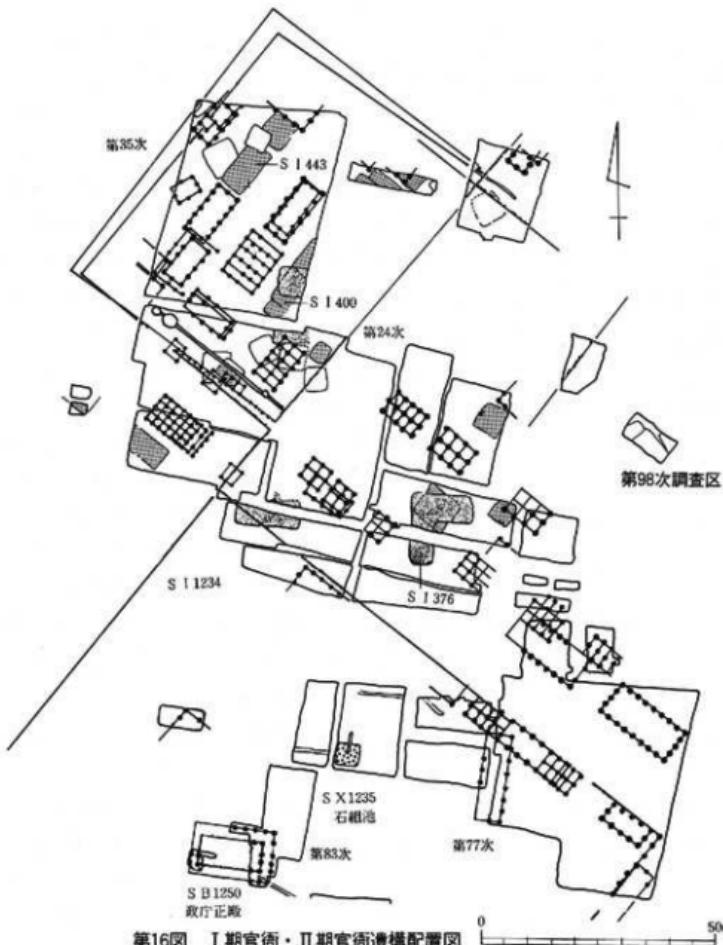
発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑3基、溝跡3条、柱穴1、ピットなどである。遺構の重複関係を見ると以下のようになる。



これらの遺構のうち出土遺物から年代の検討が可能なのはSI1386、SI1389竪穴住居跡である。SI1386竪穴住居跡の遺物のうち床面上から出土したのは土師器C-731高環のみで、坏部がほとんど残存していない。東北地方南部における古墳時代後半の土師器高環と比較すると、短い円筒状の脚部であり著しく異なる器形をしている。他地域からの搬入や須恵器の模倣の可能性もあるが、現時点では器形全体の様相が不明なことや出土例が他にないことから類例を待って検討していきたい。なおこの住居跡の掘り方やカマドのソデの構築土中から第7図に示し

たような土器が出土している。それらは住居跡の年代を直接示すものではないが、その中の須恵器 E-365 高坏は坏部の中ほどが 2 条の沈線で区画され、その中に流麗な波状沈線が施されている。脚部は残存していないが長脚で透かし穴が入るものと推定される。年代については陶邑古窯跡群のなかの高藏 43 号窯跡出土の高坏や猿投窯跡の東山 44 号窯跡出土の高坏に類似するものがある。このような土器がいかなる状況下で住居構築時に入ったのか、この時期の遺構の存在を含めて注目される。これらの他に年代の検討可能な遺物がないことから SI1386 壁穴住居跡の年代について、現時点では明らかにするのは難しいと考えられる。SI1389 壁穴住居跡については床面上から須恵器 E-364 皿、土師器 C-724 坏が出土している。須恵器 E-364 皿と類似したものは第 82 次調査区の擾乱により削平された階の上面から出土した須恵器 E-295 皿がある（註 1）。年代については陶邑古窯跡群との比較から 8 世紀の前葉の年代が与えられている。比較すると口径や調整技法はよく似ているが、口縁端部の形状や器高にやや違いが認められる。陶邑古窯跡群のなかでも前述の年代より古い高藏 217 号窯跡のなかにも類似するものがあるが、量的にはきわめて少ないという（註 2）。よってここでは 7 世紀代に通る可能性もあるが第 82 次調査区で出土した皿と同様の年代と見ておきたい。土師器 C-724 坏はケズリ調整が明瞭で赤褐色を呈し、東北地方の土師器の中には見うけられないものである。類似のものは第 35 次調査区の SK468 土坑からも出土している。今回出土した土師器 C-724 坏は、II 期官衙外郭大溝である SD35 溝跡から出土した関東系土師器としたものと調整や色調の点できわめて類似するものである（註 3）。関東地方においてこれらの土器が共伴して出土している遺跡もあり（註 4）、その範囲に含めてよいものと考える。したがってここでは土器の年代についてはこれまでの II 期官衙外郭大溝出土土器の年代観から 7 世紀の後半から 8 世紀の初頭頃のものと見ておきたい。

遺構については調査区が狭小で全容が把握できるものは少ない。その中で SI1389 壁穴住居跡は東西が 7 m を超えるものであり、本遺跡内にあっては官衙内に配置された長屋状の壁穴住居跡（註 5）と規模の点で類似している。ただしこれらの遺構は I 期官衙や II 期官と同方向で建てられており、主柱穴なども発見されていない。SI1389 壁穴住居跡の方向は E-43°-S で、I 期官衙の方向性に近い角度の振れを示している。しかし I 期官衙の中でも第 98 次調査区周辺の建物跡や材木列は真北あるいは真東西方向から 23°～34° の振れの範囲に収まっており（註 6）、I 期官衙に含められるかどうか疑問な点もある。遺構の方向性だけで考えるならむしろ I 期官衙以前の壁穴住居跡に振れの近いものがある。しかし遺構の重複関係（SA1392 → SI1391 → SI1389）から見ると、SI1391 壁穴住居跡の掘り方底面で検出された SA1392 柱穴が I 期官衙以前の遺構とは今のところ考えにくく、SI1391、SI1389 壁穴住居跡については I 期官衙かそれ以降の時期と見るべきであろう。遺物の検討の結果からも重複関係の新しい SI1389 壁穴住居



第16図 I期官衙・II期官衙遺構配置図

跡の出土遺物はII期官衙外郭大溝出土の土器の年代観などから7世紀の後半から8世紀の前葉の年代としておいた。それを踏まえればSI1389竪穴住居跡はII期官衙に属する遺構と考えられる。ただしこれまでの調査ではII期官衙の遺構は真北方向に規制されており、それらとは方向性に違いがある。この点についてはII期官衙の政府正殿や石組池より北方において遺構数が減少すること合わせて、II期官衙内の遺構のあり方を明らかにする上での課題として今後慎重に検討していきたい。

IV 第99次発掘調査

1. 調査経過

第99次調査区は、方四町II期官衙の外郭大溝南西隅から西へ140m程離れた地区に位置している。II期官衙より西部の調査は、昭和57年に行われた第27次調査のみである。そこではピット中から円面鏡が出土し、この周辺にも官衙の遺構が拡がっていると考えられた。しかし小規模な調査にとどまっており、遺跡内での遺構の様相を把握するまでは至らなかった。なお昨年度行われた第96次調査では、I期官衙の南辺と考えられるSA272及びSA1380材木列が検出されている。さらにII期官衙の遺構としては、東西方向の3本の材木列が検出されている。第99次調査は、これらの遺構が官衙の南西域においてどのように拡がるものかを明らかにする目的で実施した。



第17図 第99次調査区位置図

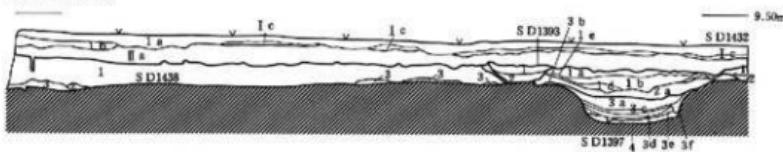
この周辺は都市化が著しい地域であり、発掘調査を実施できる地点が極めて少なくなっている。第99次調査区の調査面積は約350m²と狭小であるが、この周辺では発掘調査を実施できる数少ない適地である。

現況は標高9m程の畠地で、9月1日より土層を観察するため小規模なトレンチによる調査を開始し、調査区設定の後、重機による表土排除を行った。耕作土の厚さは0.65~0.75m程でその下が遺構検出面となっていた。なお、遺構の状況等により必要に応じて調査区の一部を拡張した。調査が進み、遺構の内容が明らかとなった11月25日に報道発表、27日に現地説明会を実施した。すべての作業を終了したのは12月13日である。

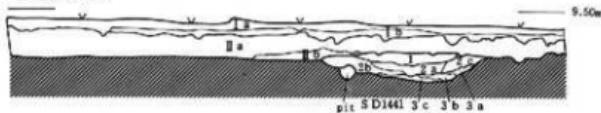
2. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列1条、材木列抜き取り溝1条、溝跡9条、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡1軒、土坑1基、小柱穴・ピットなどである。これらの遺構のうち、SA1430材木列及びSD1397溝跡以外のものについては、耕作土（I a層～II b層）直下の基本層位III

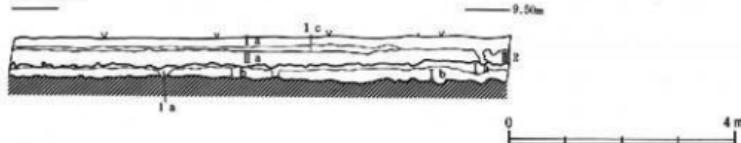
調査区北壁(東)



調査区北壁(西)



調査区東壁



層位	土色	土質	備考
基本層位			
I a	10 YR3/3 暗褐色	シルト	
I b	10 YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物と焼土を含む
I c	10 YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
II a	10 YR4/4 褐	シルト	にぶい黃褐色シルトと褐色の土質シルトをブロック状に含む
II b	10 YR4/4 褐	粘土質シルト	炭化物、酸化物、焼土を少量含む
SD1393			
1	10 YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄、マンガン粒を多く含む
2	10 YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
SD1397			
I a	10 YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒と酸化鉄を多量に含む
I b	10 YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒と酸化鉄を多量に含む
I c	10 YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を多くマンガン粒を少量含む
I d	10 YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多くマンガン粒を多く含む
I e	10 YR5/2 灰黄褐色	シルト	(火山灰?) を一部に含み酸化鉄を少量含む
SD1432			
1	10 YR4/4 褐	シルト	
2	10 YR3/3 暗褐色	粘土	
SD1441			
1	10 YR4/4 褐	シルト	マンガン粒と酸化鉄を含む
2 a	10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
2 b	10 YR4/4 褐	シルト	酸化鉄、マンガン粒を含み少量の炭化物を含む
2 c	10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒を多く含む
3 a	10 YR4/4 褐	粘土質シルト	にぶい黃褐色シルトをまだらに含む
3 b	10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土をブロック状に含む
3 c	10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土質シルトをブロック状に含む
SD1438			
1	10 YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄、マンガン粒を多く含む
2	10 YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黃褐色シルトを板状に含む
3	10 YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	

第18図 第99次調査区断面図

層上面で検出されている。

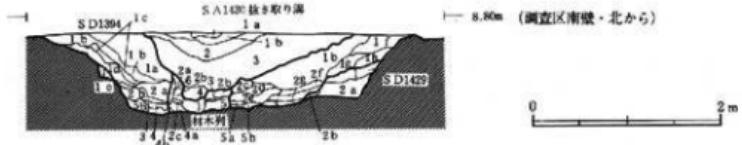
SA1430 材木列 南北に延びる材木列で、方向は N-33°-E である。幅 60~74 cm の布掘り状の痕跡を、長さ 14 m にわたり検出した。布掘り底面まで完全に抜き取られている箇所もある。抜き取りの深度が浅い部分では、直径 18~26 cm の柱痕跡が確認された。断面観察では、材木列掘り方は、遺構検出面より 86 cm ほど掘り込まれている。壁面は、底面に対してほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は灰黄褐色粘土質シルト・粘土、にぶい黄橙色粘土などで、遺構層面には、酸化鉄が帶状に含まれている。

材木列掘り方埋土下面から内面に漆が付着した土師器 C-740 壺の底部のほか、須恵器壺の口縁部片が 1 点、土師器壺の底部が 3 個体分出土している。

SD1394・SD1429 溝跡を切り、SA1430 材木列抜き取り溝によって切られている。

SA1430 材木列抜き取り溝 SA1430 材木列の掘り方と同方向に、一部広がったり蛇行したりしながら調査区外に延びている。検出した中央部から北部にかけては抜き取りの深度が深く一部では、材木列布掘り底面にまで及んでいる。抜き取り溝は上幅 2.28 m、断面 V 字形である。西壁の立ち上がりが緩やかでやや乱れていることから、西側から抜き取られた可能性がある。埋土は灰黄褐色の粘土質シルトを主体とするが、灰黄褐色粘土の小プロック・黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。

遺物は、内外面黒色処理された土師器 C-753 壺（第 20 図 1）・C-736 壺（第 20 図 2）・C-734 壺（第 20 図 3）・C-752 壺（第 20 図 4）・C-735 壺（第 20 図 5）・C-743 壺（第 20 図 6）・C-737 壺（第 20 図 7）・C-738 壺（第 20 図 8）・C-745 壺（第 20 図 9）・C-751 壺（第 20 図 10）・C-755 壺（第 20 図 11）・C-744 壺（第 20 図 12）・C-748 壺（第 22 図 1）・C-746 壺（第 22 図 2）、



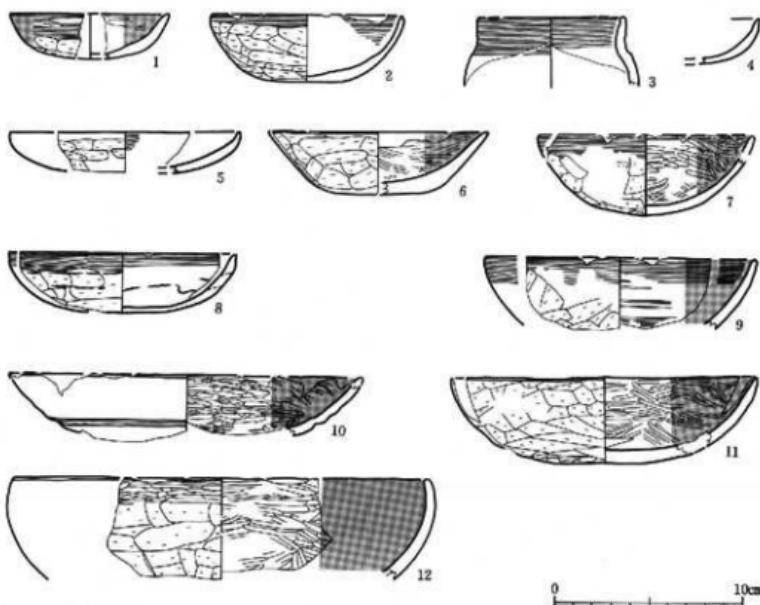
直 横	位	土 色	土 質	場	直 横	位	土 色	土 質	場
SA1430 材木列	1 a	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離	SD1394 壁面土	1 e	SD1394 壁面	粘土質シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	1 b	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離		1 f	SD1394 壁面	粘土質シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	2	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、斜面剥離		1 g	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	3	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、斜面剥離		1 h	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	4	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、斜面剥離		2 a	SD1394 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離
SA1430 材木列	1	SD1394 地盤	墨	無機、少部分有機物	SD1394 地盤土	2 b	SD1394 地盤	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	2 a	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		2 c	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	2 b	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		2 d	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	2 c	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		2 e	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	3	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		2 f	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
SD1394 地盤土	4 a	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離	SD1394 地盤土	2 g	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	4 b	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		2 h	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	5	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		3	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	6	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		4	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	7	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離		5	SD1394 地盤	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
SD1429 溝跡	1 a	SD1429 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離	SD1429 溝跡	1	SD1429 壁面	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	1 b	SD1429 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離		2 a	SD1429 壁面	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	1 c	SD1429 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離		2 b	SD1429 壁面	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	1 d	SD1429 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離		3	SD1429 壁面	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離
	1 e	SD1429 壁面	シルト	柱の跡跡と、底、斜面剥離		4	SD1429 壁面	墨	柱の跡跡と、底、斜面剥離

第19図 S A1430抜き取り溝・S A1430材木列・S D1394・S D1429溝跡断面図

外面平行叩き目・体部内面に同心円文當て具痕が明瞭な須恵器 E-370 壺（第22図5）・体部が扁平な球形で沈線で区画された中に列点刺突文が連続して施された須恵器 E-371 壺（第22図3）また土製品 P-27 紡錘車（第22図4）が出土している。

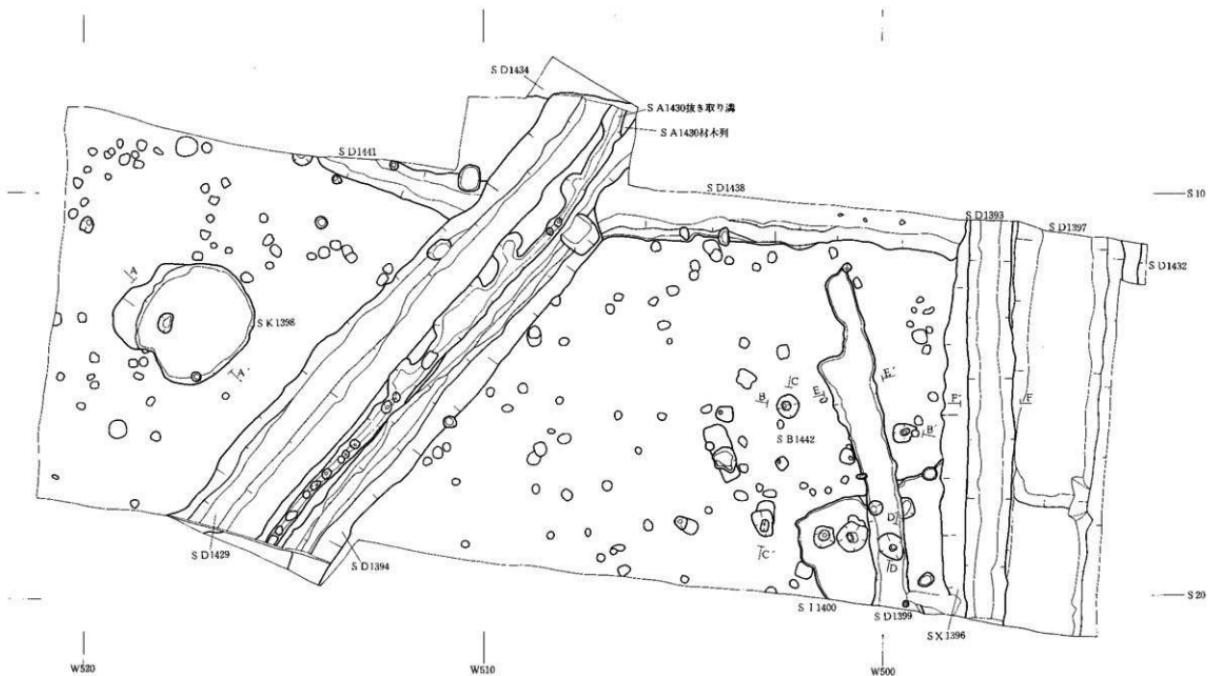
SD1429・SD1394 溝跡、SA1430 材木列を切っている。

SD1394 溝跡 南北に延びる溝跡で、西辺でN-35°-E方向に14mを検出している。上幅

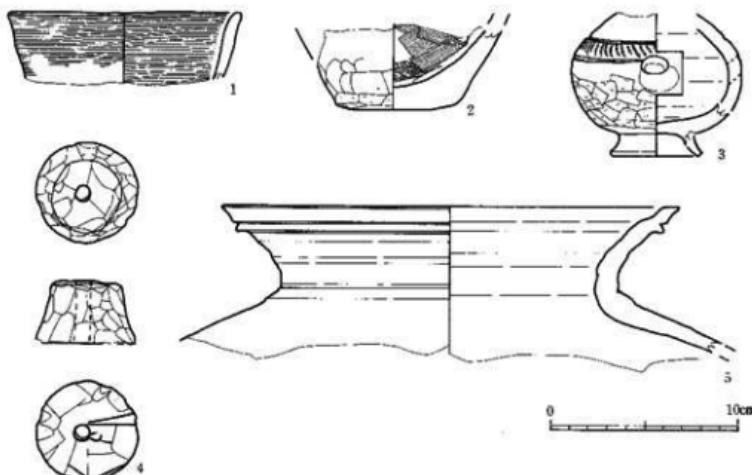


番号	立地	地質	地	法	面積(m ²)	外			内	面積	面	寸		
						地	面	積						
1	C-732 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	2.4	8.6	ナ	ア	テ	ケ	リ	ス	ダ	サ
2	C-736 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	2.6	5.1	ミコナ	テ	ヘラ	ケ	リ	ス	ダ	サ
3	C-734 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	7.8		ミコナ	テ						31-5
4	C-732 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	2.3	12.6	ミコナ	テ	ケ	リ				相
5	C-735 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	2.2	12.4	ナ	ア	ケ	リ				
6	C-743 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	3.4	11.8	ケ	ズ	リ	ケ	ズ	リ		
7	C-737 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	4.3	11.4	ミコナ	テ	ヘラ	ケ	リ	ス	ダ	
8	C-736 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	3.2	12.2	ナ	ア	ケ	リ				相
9	C-745 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	14.4		ミコナ	テ	ヘラ	ケ	リ	ス	ダ	サ
10	C-751 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	9.5					ミ	ガ	キ	ミ	ガ
11	C-756 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	4.6	8.2	ヘラ	ケ	リ	ヘラ	ケ	リ	ス	ダ
12	C-741 土壌層 井	99次	SA1430	抜き取り	22.2		ミ	ガ	キ	ケ	ズ	リ	ミ	ガ

第20図 SA1430抜き取り溝出土遺物(1)



第21図 第99次調査区造構配図 (1 / 100)



図面 番号	性 格	種 類	出 土 地 点	計 深 (m)	外 面 調 査		内 面 調 査		備 考	写 真 番 號
					上 部 形 状	底 部 形 状	上 部 体 部 形 状	下 部 体 部 形 状		
1	C-748	土器	SA1430 底面 平	99.3	抜 き 取 り	12.6	ナ ダ		ナ ダ	
2	C-746	土器	SA1430 底面 平	99.3	波 打 ち	4.5	ケ ズ リ		ハ ラ ナ ダ	31-3
3	E-371	須恵器	SA1430 底面 平	99.3	波 打 ち	4.9	ケ ズ リ		ロ ク ロ ナ ダ	31-4
4	P-27	土器	SA1430 底面 平	99.3	波 打 ち	3.4	ケ ズ リ	ケ ズ リ	ケ ズ リ	31-5
5	E-379	須恵器	SA1430 底面 平	99.3	波 打 ち	24.4	ロ コ ロ ナ ダ	タ タ キ	ロ コ ロ ナ ダ	圓心四爻

第22図 SA1430抜き取り溝出土遺物(2)

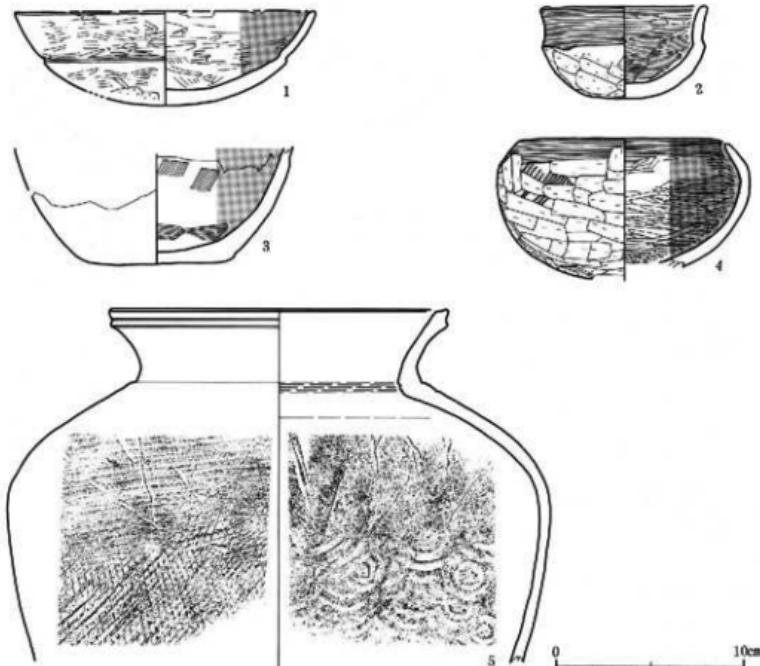
3.20~3.78 m を計る。底面は一部検出したのみであるが、幅 1.40 m 程になると推定される。断面観察では、深さ 88 cm ほどの逆台形の溝跡である。壁面は直立気味に立ち上がり、検出面より 50 cm ほどのところから緩やかに開きはじめる。堆積土は、にぶい黄橙色・灰黄褐色のシルト質粘土及び粘土質シルトである。

遺物は、土師器 C-750 壺 (第23図1)・C-732 壺 (第23図2)・C-739 壺 (第23図3)・C-742 壺 (第23図4) が底面直上層から出土している。須恵器 E-369 壺は、体部が SD1394 溝跡底面から、口縁部が SA1430 材木列抜き取り溝から出土し接合した。

SA1430 材木列および抜き取り溝に切られ、SD1429 溝跡を切っている。

SD1429 溝跡 SD1394 溝跡と同方向に延びる溝跡である。南部でのみ、溝の底面と壁面の一部が残存している。調査区南端より北へ 10 m まで検出した。北部は完全に SD1394 と重複しており検出されない。上幅 2.90 m 以上、底面幅 2.50~2.80 m、深さ 50~70 cm の逆台形の溝跡と考えられる。堆積土はにぶい黄褐色の粘土質シルトなどである。遺物は出土していない。

SD1394 溝跡・SA1430 材木列及び抜き取り溝に切られている。



実測 番号	車 輪 跡 跡 番 号	地 区	土 堆 高 度 m	底 面 形 状	幅 度 m	口 径 m	底 面 形 状	外 周 部 形 状			内 周 部 形 状			考 察	写 真 照 片
								前 壁	側 壁	後 壁	前 壁	側 壁	後 壁		
1	C-758	土師器 片	0.9	SD1394	直筒 筒上	5.0	8.0	ヨコナダ →ミガキ	タ グ リ →ミガキ		ミ ガ キ			門 面 黒色光澤	31-8
2	C-732	土 師 器 片	0.9	SD1394	直筒 筒上	4.9	8.8	ヨコナダ	ヘラケズリ		ヨコナダ →壁へり	ヘ ラ ナ ダ			31-6
3	C-742	土 師 器 片	0.9	SD1394	直筒 筒上		7.8					ヘ ラ ナ ダ		直筒に木輪印 内壁黒色光澤	31-7
4	C-728	土 師 器 片	0.9	SD1394	直筒	7.5	11.3	ヨコナダ	ハ タ ク リ →ケズリ		ヨコナダ	ミ ガ キ		内底黒色光澤	31-9
5	E-369	須 恵 器 片	0.9	SD1394	直筒		9.1	ヨコナダ	ヨ クロ ナ ダ →タ キ キ		ヨ クロ ナ ダ	両 心 円 文			31-8

第23図 S D1394溝跡出土遺物

SD1394溝跡 調査区の北端部に、東西方向に延びる溝跡を2.60 mにわたり検出した。方向はW-3°-Sである。堆積土は褐色シルト、にぶい黄褐色シルトなどである。

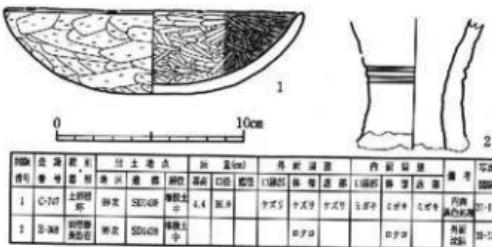
SD1394溝跡・SA1430材木列抜き取り溝を切っている。

SD1438溝跡 調査区の北壁際で、東西に延びる溝跡を9.1 mにわたり検出した。南辺での方向はE-4°-Nである。上幅は1.20 m以上、深さ30 cmほどで底面には凹凸がある。断面観察では、壁面はやや外傾しながら立ち上がるU字形の溝跡である。堆積土はにぶい黄褐色シルトを主体とする。

堆積土中より土師器C-747片(第24図1)のほか、土師器甕片、須恵器長頸壺頸部片E-368

(第24図2) などが出土している。

SD1394 溝跡とSA1430材
木列抜き取り溝の堆積土の一部を切っている。東側で検出された SD1393 溝跡、SX1396 性格不明遺構に切られてい る。



第24図 SD1438溝跡出土遺物

SD1441 溝跡 上幅 0.8~1.18 m、底面幅 40 cm、深さ 30 cm 程の溝を 3.6 m にわたり検出した。方向は南辺で E-13°-S である。断面形は U 字形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は、褐色シルト・にぶい黄褐色粘土質シルトなどである。SD1394 溝跡及び SD1438 溝跡とは、規模や方向、底面の様相から同一の遺構ではないと考えられた。遺物は出土していない。

SD1393 溝跡 上幅 1.0~1.2 m、底面幅 40~50 cm、深さ 30 cm で、断面形は U 字形である。検出した南端から N-6°-W 方向に 9.8 m 続き、さらに調査区外に延びる。底面にはやや凹凸がある。堆積土は 2 層に分けられ、第 1 層は褐灰色粘土、第 2 層は灰黄褐色砂質シルトで灰白色火山灰と考えられる。堆積土中より土師器片がわずかに出土した。

SX1396 性格不明遺構を切っている。

SDI399 溝跡 上幅 0.64~1.44 m、底面幅 0.40~1.26 m、深さ 10~20 cm で、N-17°-W 方向にわずかに弧を描き、端から 8.4 m 続き途切れている。堆積土は、褐色及びにぶ

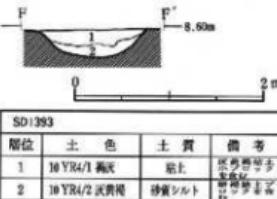
遺物は土師器坏片がわずか、須恵器片が1点のみ出土した。

SJ1400 緊穴住居跡 SB1442 捜立柱礎物跡を切っている

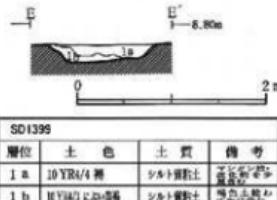
SD1432溝跡 調査区の東北端部で長さ0.96mを検出したのみである。方向はN-4°-Wほどになるものと推定される。堆積土は褐色シルト、暗褐色粘土である。SX1396を切っており、東側に向かって緩やかに落ち込んでいく。

遺物は出土していない。

SD1397 溝跡 SX1396 性格不明遺構の堆積土除去後に検出された溝跡である。検出面での上幅 2.20~2.50 m、底面幅 1.20~1.80 m、深さ 40~50 cm で断面形は逆台形である。西辺で

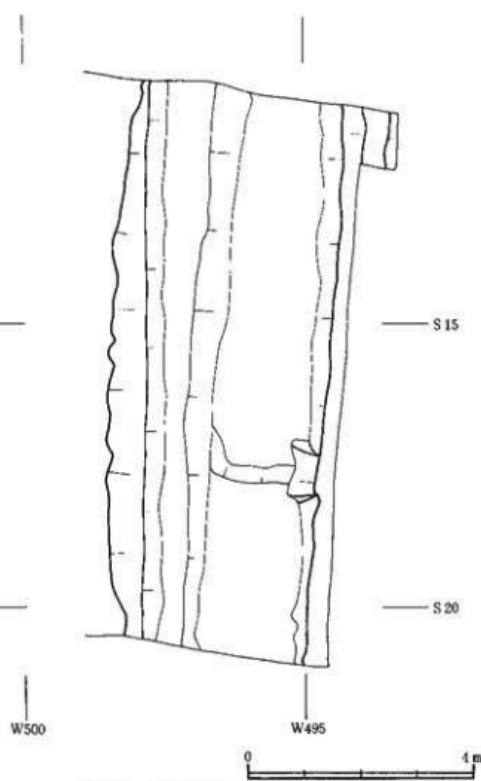


第25図 SD1393清跡断面図



第26圖 S.D.1399遺跡斷面圖

N-4°-W方向に10m程続
き、調査区外にさらに延びて
いる。壁面は底面に対してわ
ざかに外傾しながら立ち上
り、徐々に緩やかに開いてい
く。底面は平坦であるが、検
出した南端から3mのとこ
ろで5cmほどの緩やかな段
差がつく。段差付近の東壁面
には、溝の内側に向かってわ
ざかに張り出した部分があ
る。堆積土は灰黄褐色粘土を
主体とし、下層では黒褐色粘
土をしま状に含んでいる。自
然木の枝などの植物遺体、ク
ルミなどの種子が含まれてい
る。遺物は須恵器甕部片、
土師器窓・坏片・銅製品の破
片のほか、凸面の叩き目痕は
明瞭でないが、側縁面取り・
凹面布目痕の平瓦片が1点、
性格不明の石製品K-26など
が出土している。



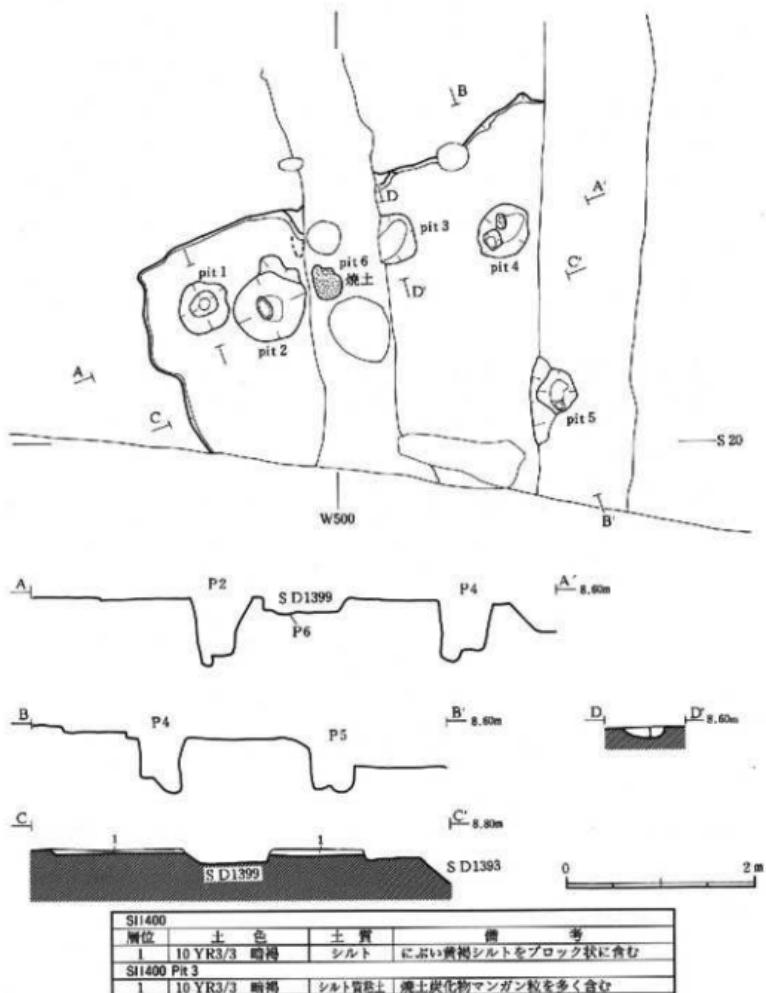
第27図 S X1396・S D1397溝跡平面図

SX1396 上幅4.3m以上で、調査区の東端で南北方向に縦断している。遺構の西壁の立ち上
がりが非常に亂れ、一定していない。深さは約50cm程度である。堆積土は、にぶい黄褐色シルト・
灰黄褐色粘土質シルト・黄褐色粘土などである。

遺物は、土師器片・甕部片・須恵器窓片のほか、凸面縛叩き・側縁面取り・凹面布目痕の
ある平瓦片が1点、また昆虫遺体やクルミなどの種子が出土している。

SD1397・SD1438溝跡を切り、SD1393溝跡及びSD1432溝跡に切られている。

SII400 積穴住居跡 東西長4.6m以上、南北長2m以上で、西辺での方向はN-29°-Wである。
削平が床面まで及んでおり、検出面から床面まで3~5cm程度である。カマドは北辺に付設
されているが、SD1399溝跡に切られており、ソデの痕跡を残すのみである。カマド前面には、



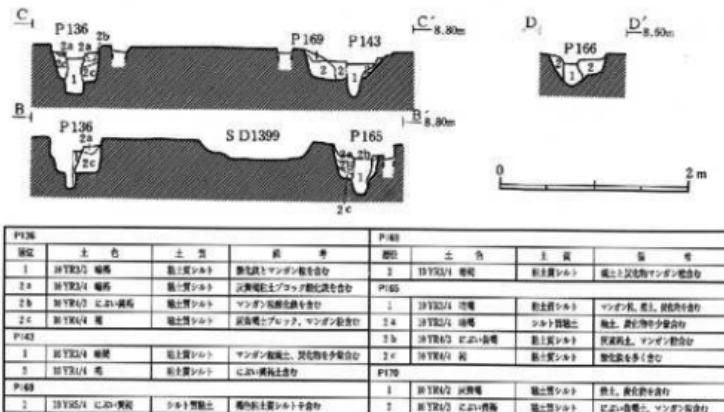
第28図 SII1400竪穴住居跡平・断面図

焼土・炭化物が分布している。主柱穴は Pit 2・Pit 4・Pit 5 で、掘り方は直径が 52~72 cm である。しかし柱痕跡が検出されなかつたため抜き取られている可能性がある。周溝は検出されなかつた。堆積土は暗褐色シルト及び粘土質シルト、灰黄褐色粘土質シルトなどである。なおこの住居跡は、床面までの精査にとどめている。

床面上からハケメ調整が明瞭で、口縁部がくの字状に外反する土師器壺の破片、土師器壺片のほか、壺底部が1点出土した。SD1399溝跡・SB1442掘立柱建物跡に切られている。

SB1442 掘立柱建物跡 東西1間以上、南北1間以上、総長3.32m(柱間寸法310cm~332cm)、南北1間Nである。柱穴は50cm程の隅丸方形で、抜き取りを受けている。柱の深さは50cm、掘り方の深さは40cmほどである。埋土は、暗褐色及びにぶい黄褐色の粘土質シルトなどである。柱穴掘り方から遺物は出土していない。

SI1400 穫穴住居跡を切り、SD1399溝跡に切られている。

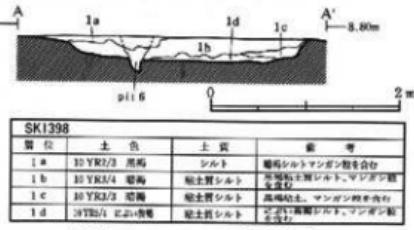


第29図 SB1442掘立柱建物跡断面図

SK1398 土坑 長軸2.8m、短軸2.6mの橢円形で、深さ26cm程の土坑である。上部削平により確認プランが乱れている。壁面はやや外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は、黒褐色シルト・暗褐色粘土質シルトなどである。底面で検出したピットもあるが、この土坑に伴うものかは判然としない。

遺物は、堆積土中から在地産の須恵器壺口縁部片が1点、他に土師器壺体部片などがわずかに出土したのみである。

Pit 6は土坑を切っているが、斜めに掘り込まれているため、断面では途中から検出している。



第30図 SK1398土坑断面図

3. まとめ

発見された遺構は、材木列 1 条、材木列抜き取り溝 1 条、溝跡 8 条、掘立柱建物跡 1 棟、豎穴住居跡 1 軒、土坑 1 基、ピット 170 個などである。重複関係の不明な遺構を除き、整理すれば次のとおりである。



(1) 官衙造営前の遺構……SI1400 豊穴住居跡

SI1400 豊穴住居跡は、方向が N-29°-W と西に偏しており、官衙と同時期に並立する遺構とは考えにくい。復元できる遺物は出土していないが、床面上から口縁部がくの字状に外反し体部にハケメ調整が明瞭な土師器壺の破片が出土している。同様の壺は東北地方南部の土師器編年で古墳時代後期の標準式遺跡となっている栗遺跡第 12 号住居跡などに類例を見ることができ（註 7）。従って出土した遺物は少ないが、本住居跡は 7 世紀前半頃のものとみておきたい。

(2) I 期官衙の遺構……SD1429 溝跡・SD1394 溝跡・SA1430 材木列・

SA1430 材木列抜き取り溝

SD1429 溝跡・SD1394 溝跡については、SA1430 材木列と同方向・同位置にあることから I 期官衙に属する遺構と考えられる。したがって I 期官衙造営初期の段階では、西辺は 2 時期の重複をもつ溝によって区画され、その後に材木列が構築されたものとみられる。新しい方の SD1394 溝跡から出土した土師器 C-732 壺は、内面が黒色処理されずナデ調整のもので、本遺跡の第 48 次調査で検出した SI1600 豊穴住居跡床面から出土した土師器 C-552 壺に類似してい

る。SI600 住居跡は、I 期官衙かその前段階の遺構と考えられているものである。本遺跡周辺で類例を求めるに栗遺跡第 17 号住居跡床面出土の土師器坏に類似するものがあり、7 世紀代には存在していると考えられる(註 8)。ところで SD1394 溝跡は官衙の区画溝と考えられるものであり、本遺跡の官衙跡は今のところ 7 世紀前半に遡るとは考えにくいことから、ここでは 7 世紀後半に属するものとみておきたい。また、土師器 C-739 は体部が扁平の球形を呈し、口縁部径が体部最大径よりも小さく内側に湾曲するものである。外面は一部ハケメ調整後ヘラケズリされ、内面が丁寧に磨かれている。形態的には須恵器の鉄鉢と類似しておりその模倣の可能性もある。器形的には藤原宮跡で、宮造當前の遺構から出土した須恵器のなかに類例を見い出すこともでき、藤原宮造當前の 7 世紀後半代のものと考えられる(註 9)。土師器 C-750 坯は、底部から口縁部まで緩やかに内弯し、体部中位よりやや上に段を持ち、内面に軽い稜がつくものである。これは第 4 次調査の SD35 溝跡 1 層出土の土師器坏類と比較すると、やや器高が高く丸底である点や段の巡る位置が高いことなどに古い要素が認められ、SD1394 溝跡の年代は 7 世紀後半代に位置付けるのが妥当と考えられる。

SA1430 材木列抜き取り溝出土遺物については、内面黒色処理された土師器とナデ調整された土師器に大別される。土師器 C-755 坯は平底に近く、体部に段や稜を有さず口縁部まで緩やかに立ち上がるるものである。これらを材木列より古い SD1394 溝跡から出土した土師器類と比較するとやや年代の新しくなる要素が指摘できよう。また須恵器 E-371 痕は、ほぼ球形の体部の上半部に 2 本の沈線が巡り、その中に刺突が連続して施されている。体部のはば中位に円孔があけられている。体部下半は手持ちヘラケズリ調整され、底部には高台が付いている。類例は少ないが、沈線の巡る位置や刺突文などに古い要素を見い出しが可能で、第 96 次調査出土の平瓶などともに 7 世紀後半代に位置付けられる遺物であろう。なお注山部の形態にやや違いはあるが 7 世紀代の横穴古墳とされる宮城県亘理町袖ヶ沢北横穴墓(註 10) から類似のものが出土している。

(3) I 期官衙以降の遺構群……SD1438 溝跡・SD1432 溝跡・SD1393 溝跡。

SX1396

SD1438 溝跡から出土した土師器 C-747 坯は、平底で体部に段や稜を持たず体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がるもので、東北地方の土師器編年の国分寺下層式期に含まれるものとみられるが、ほかに年代決定可能な遺物を出土していないので遺構の時期については概ね 8 世紀代としておきたい。

その他の遺構で検討が可能な遺物を出土したものはなく、遺構の時期は明らかでないが、出土した土師器の破片のなかにロクロ使用のものが含まれないことからいづれも 8 世紀までの遺構とみておきたい。

V 第100次調査

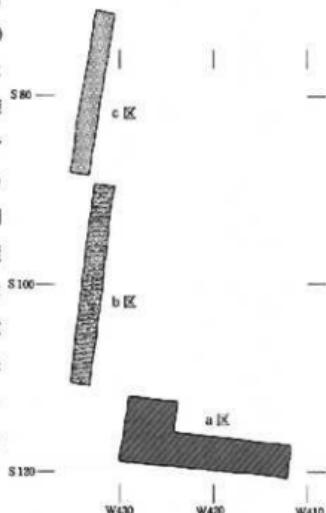
1. 調査経過

第100次調査は方四町II期官衙の南西コーナーより南西へ130mほど離れた地点である。平成4年度に実施した第96次調査区の北に隣接した箇所である。第96次調査では官衙造営以前の溝跡2条、I期官衙の材木列2条(SA272・SA1380)、II期官衙の材木列3条(SA1365・SA1378・SA1379)掘立柱建物跡5棟などを発見した。とくにI期官衙の材木列についてはこれまでの周辺の調査から南端を区画していると考えられた。さらにSA1380は調査区内で北に曲がっているが、SA272は調査区内をE-27°-S方向で横断しさらに西北方へ延びていた。今年度はSA272がどのように西に延びるのか、あるいは北に曲がるのかを明らかにするために第100次調査を実施した。

現況は標高8.8m～9mの畠地である。10月12日から試掘調査に入り、敷地内にa、b、c区を設定(300m²)し表土排除を実施した。その後遺構の検出作業に入ったが、a区の西半は畠の耕作による天地返しを深くうけ、遺構が著しく削平されていた。したがって予定した排土の量より多く、排土場の確保が困難なためa区の調査区を縮小して調査を実施した。そのため調査面積は180m²となった。調査区の遺構の全容が把握されたのは11月中旬であった。なおc区については直接官衙にかかわる遺構が検出されなかったため、遺構を確認したにとどめた。第99次調査と合わせた成果を11月25日に報道発表し、27日現地説明会を実施した。その後平面図等の作成をし、埋め戻しが終了したのは12月17日であった。

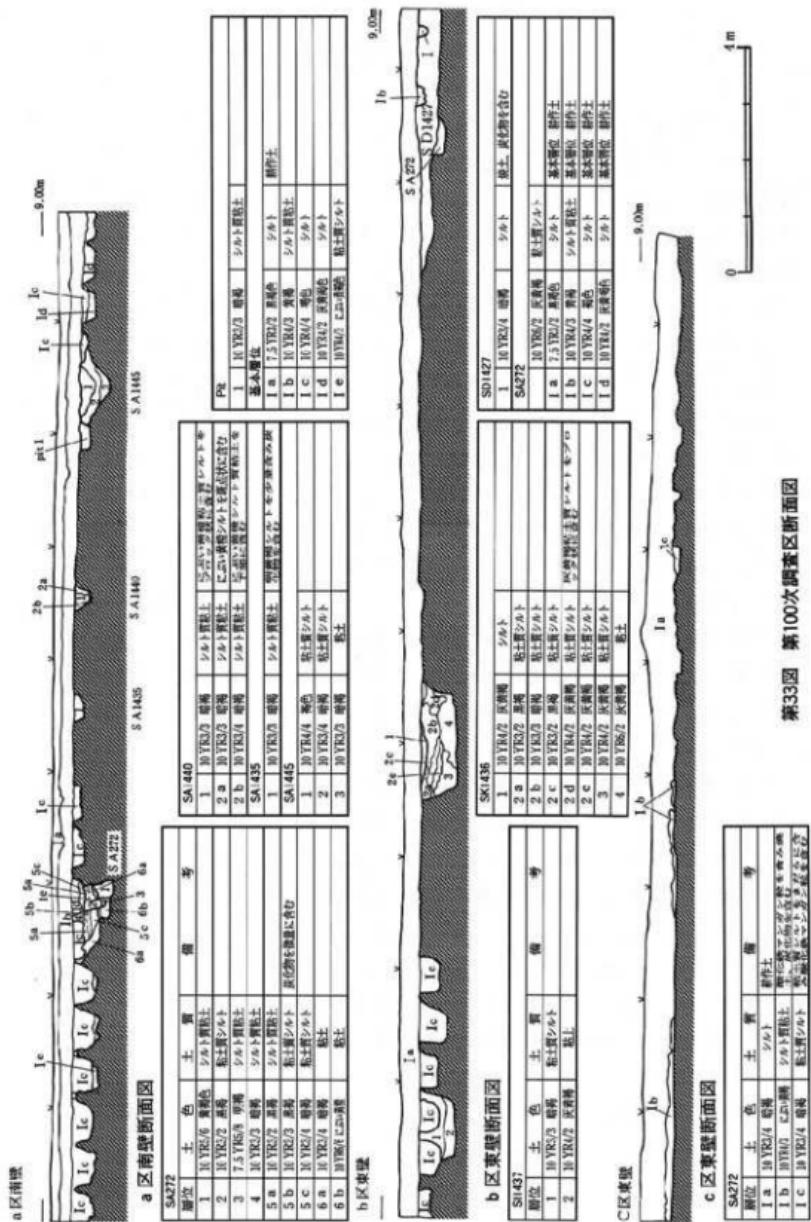


第31図 第100次調査区位置図



第32図 第100次調査区配置図

第33図 第100次調査区断面図



2. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列4条、掘立柱建物跡2棟、溝跡2条、土坑1基、井戸跡2基、竪穴遺構1基、ピットなどである。これらの遺構は耕作土(Ia~e層)直下で検出されているが、遺構の検出される上面の凹凸が著しく遺構の残存状況は良くない。

SA272 材木列 東西に延びる材木列で、方向はE-29°-Sである。検出した長さはa、b区を合わせ21.5mで、布掘りの上幅が30~65cm、深さは残存状況の良好な箇所で検出面より70cmである。布掘り底面に標高差があり、底面の浅い箇所では擾乱(烟の天地返し)により途切れている。布掘りの南壁際に直径8~17cmの柱痕跡が見られる。a区の南壁近くでは幅3cm、長さ12cmの板状の痕跡も見られる。a区の中で布掘り底面まで掘り下げたところ、小柱穴が並んで検出された(図版23)。柱痕跡が上部で検出された位置と変わらないことや小柱穴の掘り方が布掘りの南壁と完全に重複していることから、材木列の構築手順を示すものと考えられる。埋土は暗褐色シルト質粘土、暗褐色粘土などである。

遺物は埋土中から土師器と須恵器の小片が少量出土している。

SB1433 掘立柱建物跡、SA1435・SA1440・SA1445 材木列、SD1427 溝跡に切られている。

SA1435 材木列 南北に延びる材木列で、方向は真北方向である。検出した長さは1.2m程度で、北半が擾乱により削平されている。布掘りの上幅は40~60cm、深さは検出面より18cmである。布掘りのほぼ中央に直径10~15cmの柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色シルト質粘土で、遺物は出土しなかった。

SA272 材木列を切っていると推定される。

SA1440 材木列 南北に延びる材木列で、方向はN-2°-W方向である。検出した長さは3.5m程度で、北半が擾乱により一部削平されている。布掘りの上幅は25~40cm、深さは検出面より28cmである。布掘りのほぼ中央に直径10~15cmの柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色シルト質粘土で、遺物は出土しなかった。

SA272 材木列を切っている。

SA1445 材木列 南北に延びる材木列で、方向はほぼ真北方向である。検出した長さは14m程度で、北半が擾乱により一部削平されている。上方より溝状の抜き取りがなされ、調査区の南半では材木列の布掘り底面まで及んでいる。北部で残存する布掘りの上幅は30~50cm、深さは検出面より3~6cmである。布掘りの中に直径10~12cmの柱痕跡が見られる。埋土は暗褐色粘土などである。

遺物は土師器甕片、須恵器大甕片の他に、内面が黒色処理されない関東系の土師器环片が1点が出土している。

SA272 材木列を切っている。

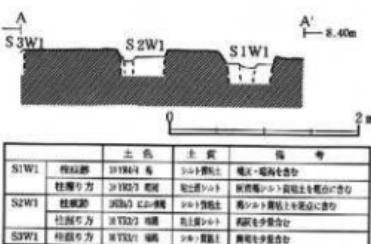
SB1433 建物跡 東西 2 間、総長 4.1 m (柱間寸法 205 cm)、南北 2 間以上、総長 2.5 m 以上 (柱間寸法 130 cm) の南北棟の建物跡と推定され、方向は西柱列で N-3°-E である。柱穴は 20~45×50~63 cm の隅丸方形で、柱痕跡は直径が 13~20 cm である。南東隅の柱穴がきわめて小規模である。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルト、シルト質粘土で、遺物は出土しなかった。

SA272 材木列を切り、SB1450 建物跡、SE1426 井戸跡に切られている。

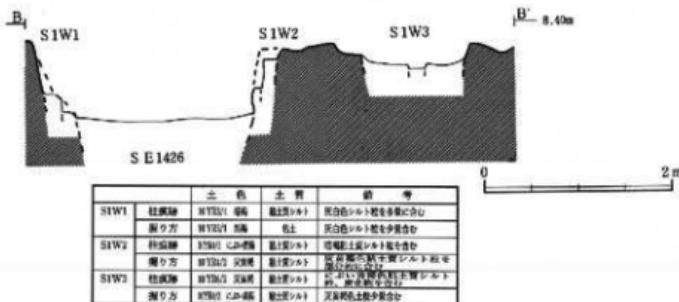
SB1450 建物跡 東西 2 間以上、総長 2.7 m 以上 (柱間寸法 180~190 cm)、南北 1 間以上、総長 2.2 m 以上 (柱間寸法 220 cm) の東西棟の建物跡と推定され、方向は南柱列で E-2°-N である。柱穴は 75~85×100~115 cm の隅丸長方形で、柱痕跡は直径が 22 cm である。柱穴の埋土は黒褐色粘土、にぼい黄褐色粘土質シルトである。

遺物は南 1 西 1 柱穴より土師器片が 1 点出土しているのみである。

SB1433 建物跡を切り、SE1426 井戸跡に切られている。



第34図 SB1433掘立柱建物跡断面図



第35図 SB1450掘立柱建物跡断面図

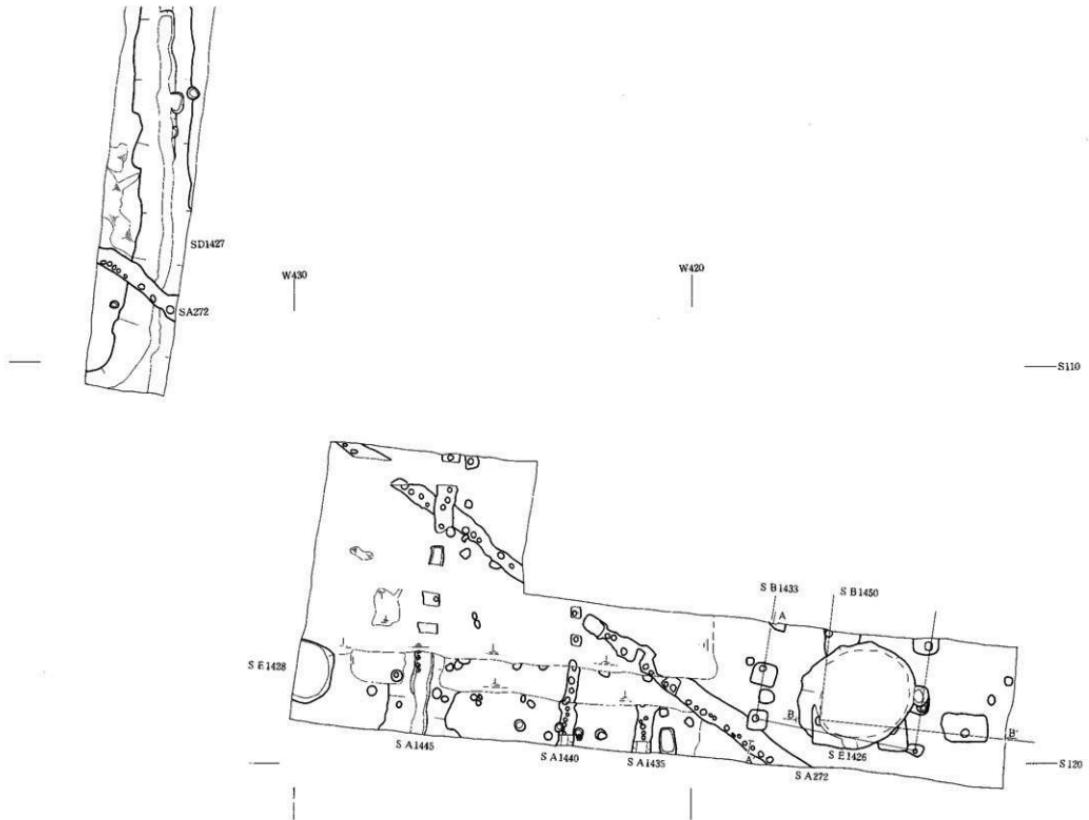
SE1426 井戸跡 直径 300 cm の円形で、深さは 90 cm 以上である。埋土は灰黃褐色粘土で、こぶし大の河原石が多量に含まれている。

遺物は陶器、磁器、瓦、明治年間の銅貨などが出土している。

SB1433、SB1450 建物跡を切っている。

SE1428 井戸跡 直径 150 cm の円形で、深さは 85 cm 以上である。埋土は灰白色粘土、灰黃褐色砂などで、遺物は出土しなかった。a 区の東端で遺構の一部を検出したにすぎない。

SD1427 溝跡 総長 19 m 以上で南北に延びる溝跡である。上幅 100~160 cm、下幅 20~60



第36図 第100次調査区構造配置図 (1/100)

cm、深さ 38~70 cm、底面は凹凸があり、断面形は逆台形で壁は直線的に広がりながら立ち上っている。方向は N-5°-W で、b 区南端で西に蛇行している。堆積土は暗褐色シルト、黒褐色粘土質シルトなどである。

遺物は土師器、須恵器、陶器片が出土している。

SD1431 溝跡、SK1436 土坑、SI1437 竪穴遺構に切られている。

SD1431 溝跡 上幅 70~90 cm、下幅 50~70 cm、深さ 6~11 cm、断面形は U 字形で壁はやや直立気味に立ち上がる。方向は E-6°-N である。堆積土は褐色粘土質シルトである。

遺物は土師器、須恵器片が少量出土している。

SK1436 土坑を切り、SD1427 溝跡に切られている。

SK1436 土坑 南北 200 cm、東西 170 cm 以上の方形の土坑と推定され、深さは 60 cm である。底面は平坦で、壁は南側が弧状に反り気味に立ち上がり、北側が直線的に立ち上がっている。堆積土は黒褐色、灰黄

褐色粘土質シルトなどで、

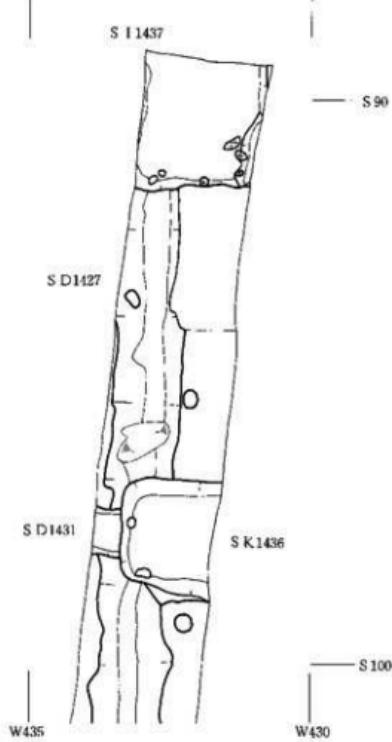
遺物は出土しなかった。

SD1427 溝跡、SD1431 溝跡に切られている。

SI1437 竪穴遺構 南北 245 cm 以上、東西 210 cm 以上で平面形は不明である。深さは残存状況の良好な箇所で 70 cm 程である。b 区の東壁際に至って 10 cm 程溝状に落ち込んでいる。堆積土は暗褐色粘土質シルト、灰黄褐色粘土である。

遺物は土師器、須恵器の小片が少量と、底面から長さ 35 cm、幅 17 cm、厚さ 11 cm の河原石が出土している。

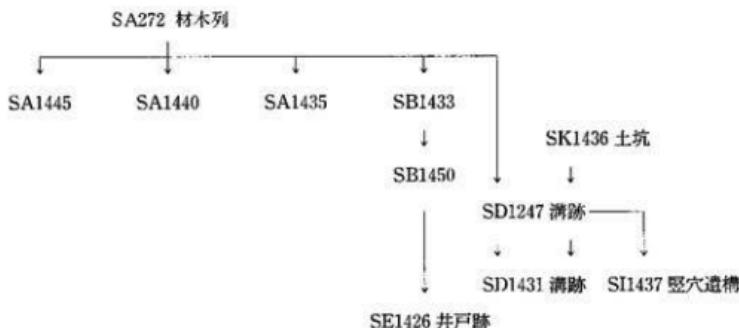
SD1427 溝跡を切っている。



第37図 第100次調査遺構配置図（b 区北部）

3. まとめ

発見された遺構は、材木列4条、掘立柱建物跡2棟、土坑1期、井戸跡2基、堅穴遺構1基、ピットなどである。重複関係を見ると以下のような。



(1) I 期官衙の遺構………SA272

SA272 材木列は、昨年度の第 96 次調査区で検出した SA272 材木列の西延長上で検出された。第 96 次調査区での状況と比較すると柱痕跡の残存がよく、柱痕跡が掘り方の南壁に寄って



第38図 I 期官衙の材木列



いるという特徴がみられる。擾乱の著しい箇所では途切れているが調査区を横断し、さらに西に延びている。I期官衙の南限を区画していると考えられる。I期官衙の南辺・西辺についても第99次調査区と合わせて「VI 総括」の中でさらに検討する。

(2) II期官衙の遺構群……SA1435、SA1440、SA1445 材木列

SB1433、SB1450 掘立柱建物跡

3列の材木列は擾乱により一部で途切れてはいるが、調査区を南北方向へ横断していると考えられる。昨年度の第96次調査区でも3列の材木列(SA1365、SA1378、SA1379)が東西方向に横断していた。第96次調査の3列の材木列にはSA1445材木列のような幅の広い抜き取りは認められなかったが、布振り幅や材痕跡は今回検出した材木列とほぼ同じ規模である。周辺の調査や旧河道の存在から第96次調査の東西方向の材木列がこのまま大きく西方向に延びると今は今のところ考えにくい状況にある。したがって第96次調査で検出された3列の材木列がL字形に北へ曲がって今回検出された3列の材木列に接続していたと推定しておきたい。今回検出された材木列はいずれももっとも南で検出されているSA1365材木列とほぼ直交しているが、各々の対応関係や時期差については不明である。

昨年度と今年度の調査により、II期官衙段階には方四町II期官衙の南西外にも材木列で区画された官衙ブロックが存在したことが明らかになった。こうした官衙ブロックがII期官衙の中でどういった機能を果していたかについては今後の課題であろう。

VI 総括

今年度は第3次5ヵ年計画の4年次にあたり、当初はII期官衙と同時期の郡山廃寺の中枢伽藍東部の調査予定であった。仙台市の進める再開発事業の範囲がI期官衙の南西部に及ぶことになるため、早急に遺跡の内容を把握する必要があり、当初の調査地区を変更して第99次と第100次の発掘調査を実施した。さらに個人住宅建築に伴う発掘届が提出され、小規模な事前調査を第98次調査として実施した。第99次調査と第100次調査では昨年度に引き続き、主にI期官衙の南辺、西辺と考えられる遺構を検出した。第98次調査は調査面積がきわめて小さいため、堅穴住居跡などの一部を検出しただけである。

1. I期官衙の調査

昨年の第96次調査区で検出したI期官衙の材木列2列のうちSA272材木列は調査区外の西に延び、SA272材木列より古いSA1380材木列は調査区内で北へL字に曲がっていた。2列の材木列ともI期官衙の南限を区画していると考えられ、東方の第13次・第28次調査で検出した材木列に接続していたと推定した(註11)。この調査地区より西に300m程離れた長町駅東遺跡の調査(註12)では、直接官衙に関わる遺構は認められなかった。その間ではこれまで小規模な発掘調査が実施されただけで、I期官衙の様相は明らかになっていない。したがって西に延びるSA272材木列がどこまで延びているかがI期官衙の西限を明らかにする上で重要と考えられた。第100次調査では第96次調査区で検出したSA272材木列の延長線上で材木列が検出され、さらに西に延びていた。さらにその延長上である長町駅東遺跡のE-3トレンチまでは延びていない。その途中で発掘可能な地点がないため、北にやや外れた地点で第99次調査を実施したのである。そこでSA272材木列にほぼ直交するようにSD1394・SD1429溝跡、SA1430材木列、SA1430材木列抜き取り溝などが発見された。SA1430材木列の掘り方や柱痕跡は方四町II期官衙の外郭となる材木列と比較しても、柱痕跡がやや小さいだけで同様の規模を持っている。さらにこの材木列は徹底した抜き取りをうけ、材木列掘り方の底面まで及んでいる箇所がある。そこでは材痕跡はまったく検出されず、断面形がV字状の抜き取り溝のみがSD1394、SD1429溝跡と重複しているだけである。このような特徴を持つ遺構としては昭和61年(1986)の第63次調査で検出されているSD881南北溝跡をあげることができる。調査当時、SD881溝跡はやや埋まりかけてからV字形に深く掘り直したと捉えていた。しかし今回SD881溝跡について再検討したところ、平面形・断面形の特徴は今回の調査での抜き取り溝と溝跡との重複ときわめて類似している。したがってSD881溝跡の場合も溝跡→(材木列)→抜き取り溝の重複と見ることも可能である。SD881溝跡の位置や方向、およびこの溝跡より東ではI期官衙の

遺構が少なくなることなどから見て、これをⅠ期官衙の東辺と推定することもできよう。
これまでの調査で発見されたⅠ期官衙の南端での遺構を整理すると以下のようになる。



第63次調査区ではSD881溝跡の他にⅠ期官衙の遺構としてSD882南北溝跡がある。規模や方向はSD881溝跡と同様である。SA1380とSA103材木列が東辺においてどのような遺構と接続しているのかは明らかでないが、今回のように抜き取り痕跡が材木列掘り方底面まで及んでいるような状況を考えると、SD882溝跡に接続していた可能性もある。SA272とSA104材木列は昨年度検討したとおり同一の遺構と考えられた。第13次調査でも抜き取り痕跡が検出されており、第96次調査区のSA272材木列も同様に理解したが(註13)、今回の第100次調査では抜き取り痕跡は全く認められなかった。これについては、上部のみ開削し一定の深さで切り取られたもので、今回の調査地では削平がきわめて著しいために上部の柱切り取り痕跡が検出されなかつたものと見ておきたい。このようにⅠ期官衙南端における遺構の重複を見てくると、材木列による区画が最終段階で抜き取りあるいは切り取りと言えるような作業が行なわれたものと推定される。ただしSA272材木列とSA1430材木列の材痕跡の大きさに違いがあり、今後検討しなければならない点もある。今のところ遺跡南側で観察される旧河道による段差が1~1.5mあり、それに関連して遮蔽施設の規模に違いが出た可能性を考えておきたい。



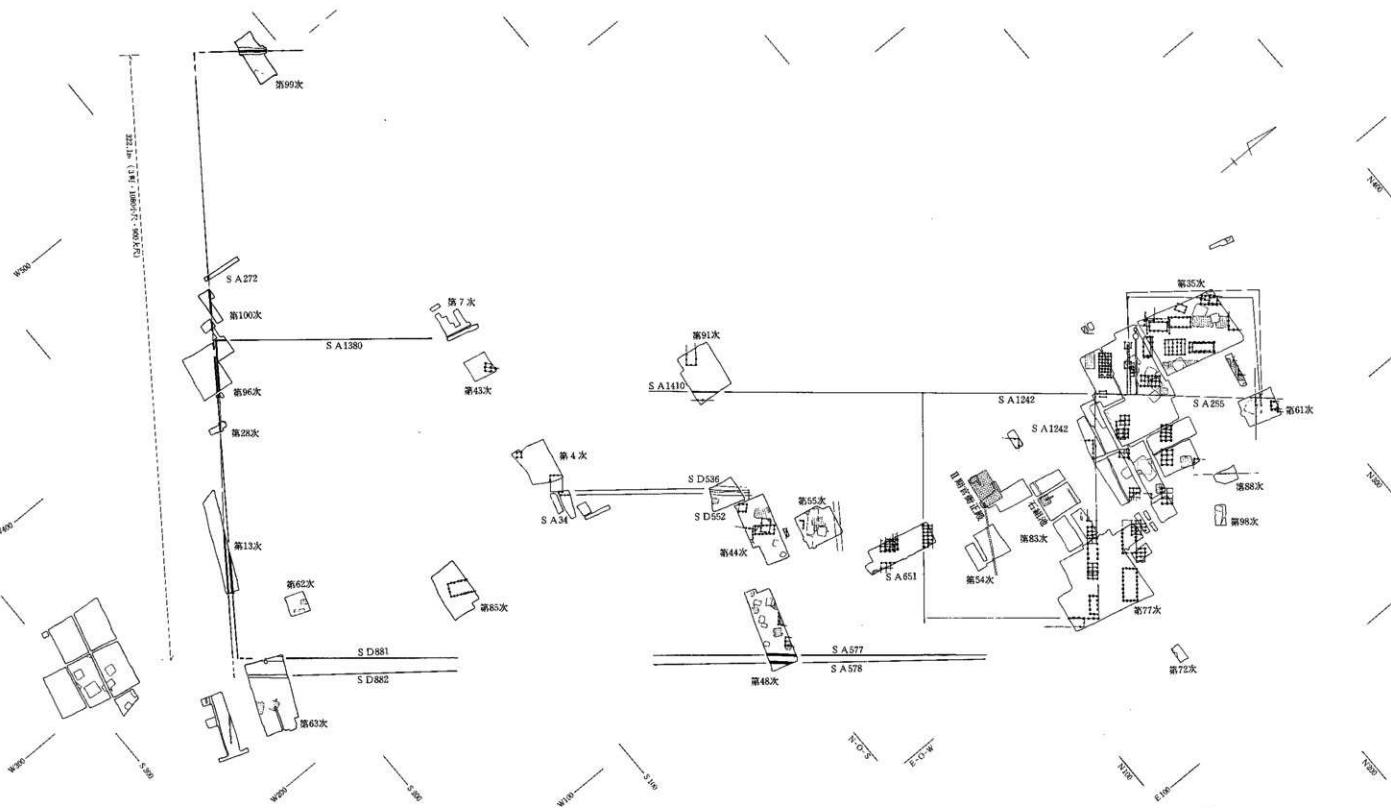
第40図 I期官衙南部造構配置図

今回明らかになった造構の状況からI期官衙の南端部における様相を検討してきた。それによりSD881南北溝跡に材木列との重複があり、それがSA272材木列およびSA1430材木列と接続して区画を構成していた場合についてさらに検討してみたい。各接続部のコーナーは検出されていないので推定の域を出ないが、仮に第40図のように図上で東南コーナーと西南コーナーを求めるときその間の距離は322.11216…mとなる。これを町、令小尺（唐尺）、令大尺（高麗尺）で標記すると、

$$\begin{aligned}
 322.11216 \text{ m} &\approx 107.370 \text{ m} \times 3 & (3 \text{町}) \\
 0.2982 \text{ m} \times 1080.18 && (1080 \text{ 小尺}) \\
 0.3579 \text{ m} \times 900.00 && (900 \text{ 大尺})
 \end{aligned}$$

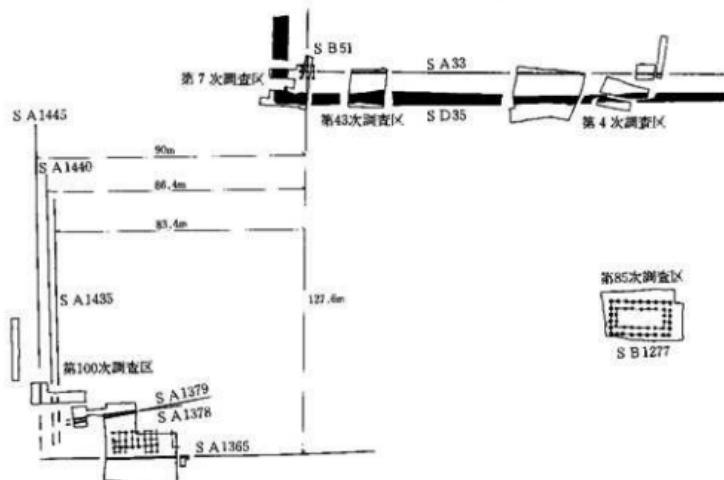
となり、大尺ではきわめて区切りのよい数値となる。ただし郡山遺跡のI期官衙の造構配置（第41図参照）を見ると小尺でも測定できる箇所もあり、大尺により造営されたのかについてはI期官衙内部についてさらに検討する必要がある。ここでは可能性を指摘するに留めたい。

今年度の調査によりI期官衙の東西幅が想定できた。これまでの調査でI期官衙の造構はSA272材木列の北で560mまで確認されている。したがってI期官衙の広がりは東西322m×南北560m以上であり、7世紀の後半代の地方官衙のあり方を知る上で貴重な成果を上げたと考えられる。



第41図 I期宮衙全体図

方四町Ⅱ期官衙



第42図 Ⅱ期官衙西南部遺構配置図

2. Ⅱ期官衙の調査

第100次調査区で検出された3列の材木列(SA1435、SA1440、SA1445)は、昨年度の第96次調査区で発見されていた3列の材木列(SA1365、SA1378、SA1379)が北にL字に曲がったものと推定される。これらの材木列によって区画されたブロックはⅡ期官衙の外郭西辺材木列から西へ83~90m、南辺材木列から最も南のSA1365までは127.6mである。とくに昨年の調査では内部の建物跡が総柱の建物や床束をもつ建物跡など倉庫ふうの建物跡である点が注目される。この官衙ブロックの性格については、Ⅱ期官衙との配置や規則性など周辺の調査成果の蓄積を待って検討していきたい。

註・参考文献

度々、引用される郡山遺跡調査概報については次のとおりである。

- | | | | |
|--------|--------------------------------------|-------|--------------------|
| 「郡山報Ⅰ」 | 仙台市文化財調査報告書第23集「年報Ⅰ」「郡山遺跡発掘調査概報」1980 | | |
| 「郡山Ⅰ」 | 〃 第29集「郡山遺跡Ⅰ」1981 | 「郡山Ⅱ」 | 〃 第38集「郡山遺跡Ⅱ」1982 |
| 「郡山報Ⅱ」 | 〃 第42集「郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急調査」1982 | | |
| 「郡山Ⅲ」 | 〃 第46集「郡山遺跡Ⅲ」1983 | 「郡山Ⅳ」 | 〃 第64集「郡山遺跡Ⅳ」1984 |
| 「郡山Ⅴ」 | 〃 第74集「郡山遺跡Ⅴ」1985 | 「郡山Ⅵ」 | 〃 第86集「郡山遺跡Ⅵ」1986 |
| 「郡山Ⅶ」 | 〃 第96集「郡山遺跡Ⅶ」1987 | 「郡山Ⅷ」 | 〃 第110集「郡山遺跡Ⅷ」1988 |
| 「郡山Ⅸ」 | 〃 第124集「郡山遺跡Ⅸ」1989 | 「郡山Ⅹ」 | 〃 第133集「郡山遺跡Ⅹ」1990 |
| 「郡山Ⅺ」 | 〃 第146集「郡山遺跡Ⅺ」1991 | 「郡山Ⅻ」 | 〃 第161集「郡山遺跡Ⅻ」1992 |
| 「郡山Ⅼ」 | 〃 第169集「郡山遺跡Ⅼ」1993 | | |

註1 「郡山Ⅸ」

註2 中村浩「和泉陶邑空の研究」柏青房 1981

註3 「郡山Ⅴ」

とくに第43次調査SD35清跡出土の土器器C-500环とは、形態は違うが内外面の調整、胎土、焼成などが同様である。

註4 八幡太神南遺跡 A 1号住居跡

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集「立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁目・川越田・梅沢」1985

東日本埋蔵文化財研究会「第3回東日本埋蔵文化財研究会 古代官衙の終末をめぐる諸問題－第II分冊 県別資料報告－」1984

註5 「郡山Ⅳ」第55次調査

本遺跡ではこれらの遺構を竪穴建物跡として扱っている。

註6 I期官衙の方向性については調査地点によりばらつきがあり、26°～40°ほど東へ振れている。

註7 仙台市文化財調査報告書第43集「柴遺跡」1982

註8 註7と同じ

註9 古代の土器研究会編「古代の土器1 都域の土器集成」1992

註10 宮城県亘理町「亘理の古墳」1975

註11 「郡山Ⅹ」

註12 仙台市文化財調査報告書第170集「仙台平野の遺跡群Ⅱ」1993 長町貨物ヤード跡地

註13 註11と同じ

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当職員	主 催
5. 7. 9	社員研修講話「仙台市の文化財」	木村	日本メックス株式会社
8. 5 ～7	第21回サマーセミナー発表	長島	古代史サマーセミナー
9. 26	ふるさと太白再発見 文化財めぐり「郡山から多賀城への道」	木村	中田市民センター
10. 19	遺跡見学会	長島・熊谷	仙台歴訪会
10. 21	遺跡・施設めぐり	木村	一番町市民センター
11. 5	遺跡見学会	長島	貝ヶ森市民センター
11. 25	第99次・100次調査報道発表	長島	仙台市教育委員会
11. 27	現地説明会	長島・熊谷	仙台市教育委員会
12. 18	宮城県内発掘調査成果発表会	長島	宮城県教育委員会
6. 2. 18	第6回地域文化考講座 パネルディスカッション 『わが町の「今昔と街づくり」を語る』	木村	八本松市民センター
2. 26 27	第19回古代城柵官衙遺跡検討会	長島・熊谷	

2. 調査成果執筆

河北新報11月9日～2月1日 10回連載

『白鳥の北都』

—幻の古代城柵・郡山遺跡— 白鳥

3. 調査指導委員会の開催

第22回 郡山調査指導委員会 6年3月16日 北庁舎4F第1会議室

○平成5年度の事業報告について

○平成6年度の調査計画について

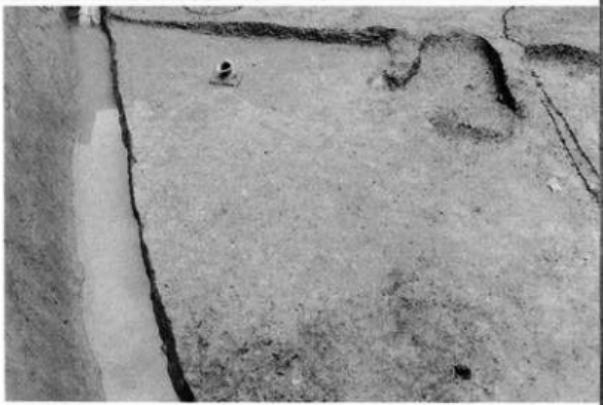
仙台市博物館 常設展「原始・古代・中世」

八本松市民センター 「郡山遺跡資料展示」

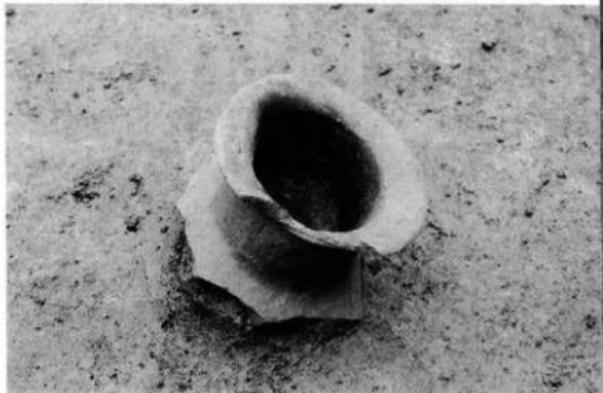
写 真 図 版



図版 1
第98次調査区全景
(東より)



図版 2
S I 1386竪穴住居跡
全景 (南より)



図版 3
S I 1386遺物出土状況
C-731高坏 (北より)



図版4 S I 1389竪穴住居跡
全景（南より）



図版5 S I 1389竪穴住居跡
カマド（南西より）

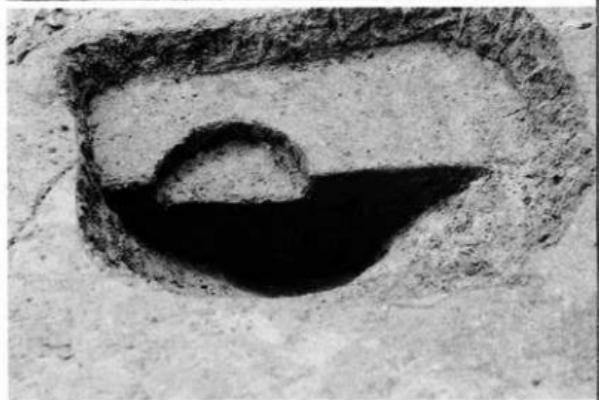


図版6 S I 1389遺物出土状況
C-724杯（北より）

図版 7
S I 1391竪穴住居跡
掘り方底面（東より）



図版 8
S A1392柱穴
セクション（北より）





図版9 第99次調査区全景
(西より)



図版10 S A1430材木列・抜き取り溝
S D1394溝跡・S D1429溝跡
全景 (南西より)



図版11
S A1430材木列
抜き取り溝
S D1394溝跡
S D1429溝跡
土層断面
(北東より)



図版12 S A 1430抜き取り溝

遺物出土状況

E - 371 瓦



図版13 S A 1430抜き取り溝

遺物出土状況

E - 370 瓦

図版14

S D1394溝跡

遺物出土状況

C - 739 瓦

E - 369 瓦

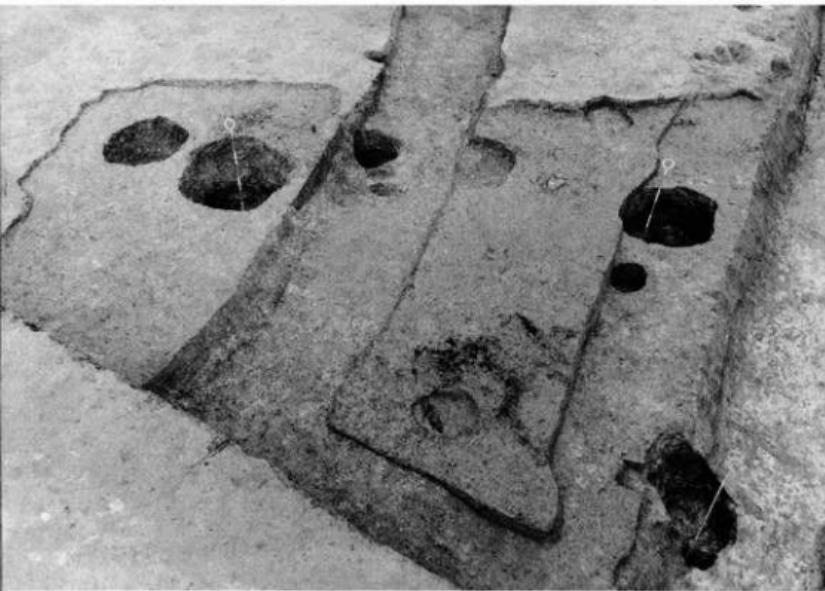


図版15

S D1394溝跡

遺物出土状況全景（南西より）





図版16
S I 1400竪穴住居跡
全景（南より）



図版17
S D1397溝跡全景
(南より)



図版18
第100次調査区遠景
(東より)



図版19
第100次調査区全景①
(東より)



図版20
第100次調査区 a 区
全景②（西より）



図版21
S A272材木列全景
(南東より)



図版22
S A272 材木列
柱痕跡（北より）



図版23
S A272 材木列底面

図版24

左から S A1435・S A1440
S A1445材木列全景
(北より)



図版25

S B1433・S B1450据立柱
建物跡全景 (北より)



図版26

第100次調査区 b 区
S A272材木列検出状況①
(東より)



図版27
S A272材木列検出状況②
(東より)

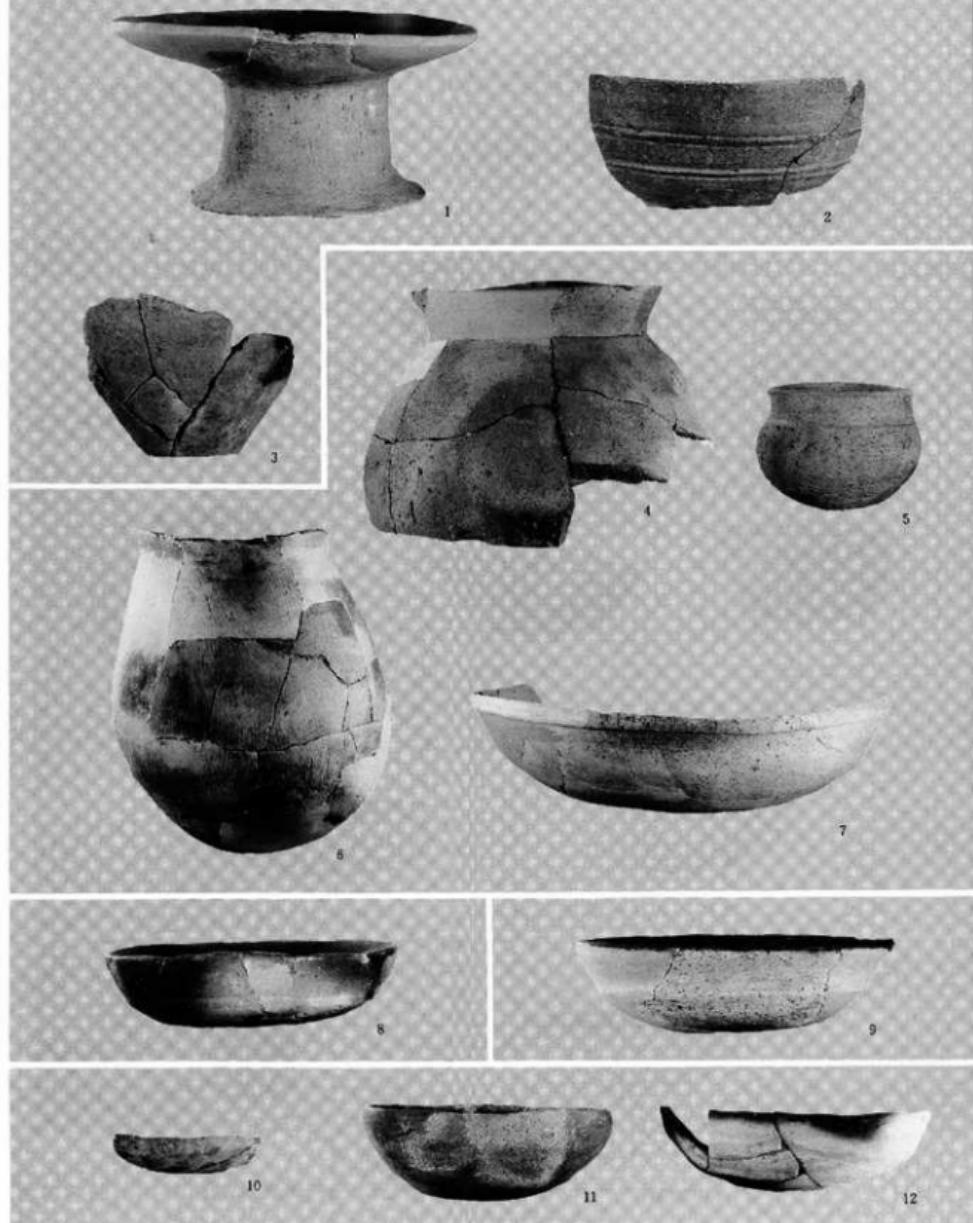


図版28
第100次調査区
b 区全景
(南より)



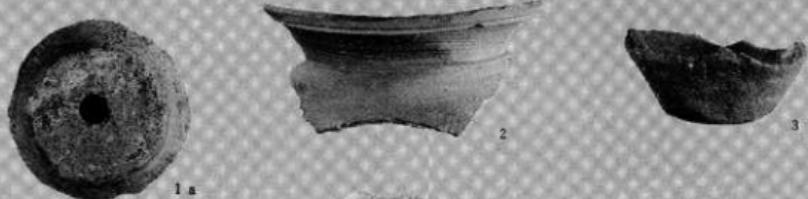
図版29
第100次調査区
c 区遺構確認
状況 (南より)





98次 S II 1386 1. C-731 高杯
 S II 1389 2. E-365 高杯 3. C-728 瓢
 S D 1384 4. C-721 瓢 5. C-724 瓢
 6. C-720 瓢 7. E-364 盆
 8. C-725 瓶 9. C-730 表接
 99次 S A 1450抜き取り器 10. C-738杯 11. C-745杯 12. C-755杯

図版30 第98次・99次出土遺物



- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|------------|
| S A1430抜き取り溝 | 1. P-27 絡縫車 | 2. E-370 簋 | 3. C-746 簋 |
| S D1394溝跡 | 4. E-371 聽 | 5. C-736 环 | |
| S D1438溝跡 | 6. C-732 环 | 7. C-742 簋 | 8. E-369 簋 |
| | 9. C-739 环 | 10. C-750 环 | |
| | 11. C-747 环 | 12. E-368 簋 | |

図版31 第99次調査出土遺物

文化財課職員録

課長 白鳥 良一

〔管理係〕

係長 菅原 澄雄
主任 村上 道子
主事 福井 健司
主事 庄司 厚
主事 齋藤 英治
主事 佐藤 寿江

〔調査第一係〕

係長 田中 則和
主任 木村 浩二
教諭 佐藤 好一
主任 吉岡 恭平
主任 金森 安孝
教諭 小川 淳一
主任 工藤 哲司
主任 主浜 光朗
主任 斎野 裕彦
主任 長島 荣一
教諭 稲葉 俊一
教諭 菅原 裕樹
主任 渡部 紀
教諭 川名 秀一
教諭 熊谷 裕行

〔調査第二係〕

係長 結城 慎一
主任 篠原 信彦
教諭 太田 昭夫
主任 佐藤 洋
主任 佐藤 甲二
主任 渡部 弘美
主任 工藤信一郎
主任 荒井 格
主任 中富 洋
主任 平間 亮輔
教諭 五十嵐康洋
教諭 神成 浩志
教諭 赤澤 培章
教諭 竹田 幸司
主任 佐藤 淳

仙台市文化財調査報告書第178集

平成5年度

郡山遺跡 XIV

平成5年度発掘調査概報 —

平成6年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

印刷 (株) 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL.263-1166
